



ILCAA

アジア・アフリカ言語文化研究所

Research Institute for Languages and Cultures of Asia and Africa

東京外国語大学

要覧2009

A Guide to Research Institute for Languages and Cultures of Asia and Africa



目次

概要

■ 所長あいさつ	01
■ AA研の研究活動	02
■ 研究組織構成	03
■ 研究・運営体制	04
■ 役職・所内委員	06

共同研究

■ 共同研究プロジェクト	08
■ フィールドサイエンス研究企画センター(FSC)	15
■ 中東イスラーム研究教育プロジェクト(MEIS)	16
■ 海外研究拠点	17
■ 東南アジアのイスラーム ——トランスナショナルな連関と 地域固有性の動態(ISEA)	18
■ 海外学術調査総括班(OSC)	18
■ 言語ダイナミクス科学 研究プロジェクト(LingDy)	19
■ シンポジウム/ワークショップ	20

研究資源

■ 情報資源利用研究センター(IRC)	22
■ アジア書字コーパス拠点(GICAS)	23
■ 音声学実験室	24
■ 文献資料コレクション	24

研究者養成・成果公開

■ 言語研修	26
■ 中東・イスラーム研究セミナー 中東・イスラーム教育セミナー	27
■ ベイルート若手研究者研究報告会	27
■ コーパスに基づく 言語学教育研究拠点(CbLLE)	28
■ Fieldling: 記述言語研究コミュニティ	28
■ 企画展	29
■ ウェブサイト	29
■ 出版物	30
■ 研究スタッフ	32
■ 関連資料	41
■ 予算	51
■ 沿革	52

所長あいさつ



アジア・アフリカ言語文化研究所所長

栗原 浩英

本研究所は、アジア・アフリカの言語文化に関する総合的研究を目的とする全国共同利用研究所として1964年に設置されました。それ以来今日に至るまで、国内外の研究者との共同研究の展開、海外学術調査の実施と総括、研究資料の蓄積と公開、言語研修などの研修事業を通じた若手研究者養成への寄与、辞典編纂などを通じて、日本のアジア・アフリカ研究をリードし、その発展と深化に大きな役割を果たしてきました。近年は「中東イスラーム研究教育」や「言語ダイナミクス科学研究」などの大型研究プロジェクトを展開するに至っています。

さて、「グローバル化」という語も今やすっかり定着したかの観があります。冷戦時代と比べるとアジア・アフリカにおいて物質生活、情報・通信などの面で近似化が進む一方、「市場」、「民主主義」、「人権」など共通のタームが増えてきたことは確かです。しかし、最近、表面的には同一のタームであるかのようにみえても、実際にはそれが地域や国ごとに独自の意味合いを付与されながら、運用されているケースが多々あるように思われます。こうした現象一つをとってみても、その背景を理解するためには、本研究所が創立以来とり組んできたような、アジア・アフリカの言語文化の深層に食い込んだ研究をさらに発展させることが必要不可欠となっています。まして、アジア・アフリカには地球人口の70%を超す人々(約48億人)が暮らしており、その中には近年著しく政治的・経済的に発言力を増大させている国や地域があります。アジア・アフリカ地域の動向が地球社会の未来を大きく左右するといっても過言ではないでしょう。

本研究所は現在、国立大学法人東京外国語大学に附置されていますが、大学の法人化(2004年)後も全国共同利用研究所として法人の枠を越えて、国内外の広範な研究者コミュニティと連携した研究活動を展開してきました。しかし、本年度をもってこれまで55年間続いた「全国共同利用」という制度は廃止され、来年度からは「共同利用・共同研究拠点」という新しい制度が始動することになります。いかなる状況にあっても、本研究所は国内外の研究者コミュニティとの連携の強化・拡大に全力を傾注し、アジア・アフリカの言語文化に関する国際的な共同研究拠点たるにふさわしい活動をする所存です。皆様のご指導・ご支援をお願い申し上げます。

アジア・アフリカの言語文化の
深層に食い込んだ研究をさらに発展させる





AA研の研究活動

AA研は、アジア・アフリカの諸地域を主な研究対象とする人文系の全国共同利用研究所です。言語学・人類学・歴史学の各分野に、わが国随一の規模を誇る多くのスタッフを擁しています。全国共同利用研究所として、法人の枠をこえて国内外の研究者と広く連携した調査・研究活動を展開することをもっとも重要な使命としています。

本研究所の当初の設置目的は、(1)アジア・アフリカの言語文化に関する総合的研究、(2)アジア・アフリカ諸言語の辞典編纂、(3)アジア・アフリカ諸言語の教育訓練、の3つでした。

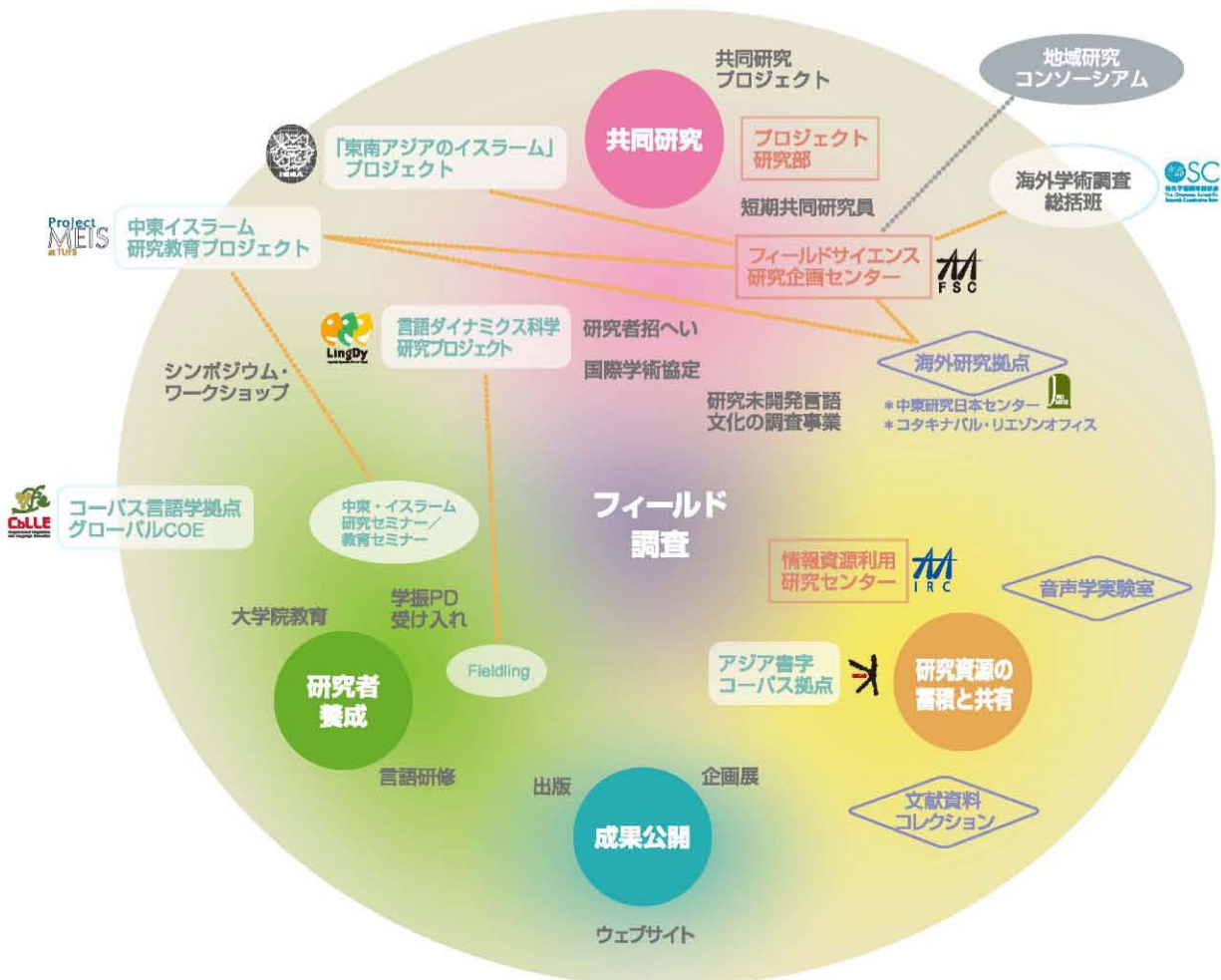
アジア・アフリカ地域の政治・経済・社会の急激な変化や、既存の研究分野の枠を越えた新しい学問・理論構築の要請、情報処理技術の革新などを承け、本研究所は当初の設置目的を現在の状況に即して見直し発展させた次のような長期的な基本目標を設定しました。

■ 臨地研究(フィールドサイエンス)を核とした国際的研究拠点として国際的水準の研究を先導するにふさわしい研究領域を設定し、国内外の共同研究プロジェクトを推進する。

■ アジア・アフリカ諸地域の言語・文化等に関する研究資料・情報を研究資源として利用可能な形に編纂し、それを国際的に共有するための研究資源拠点としての活動を進める。

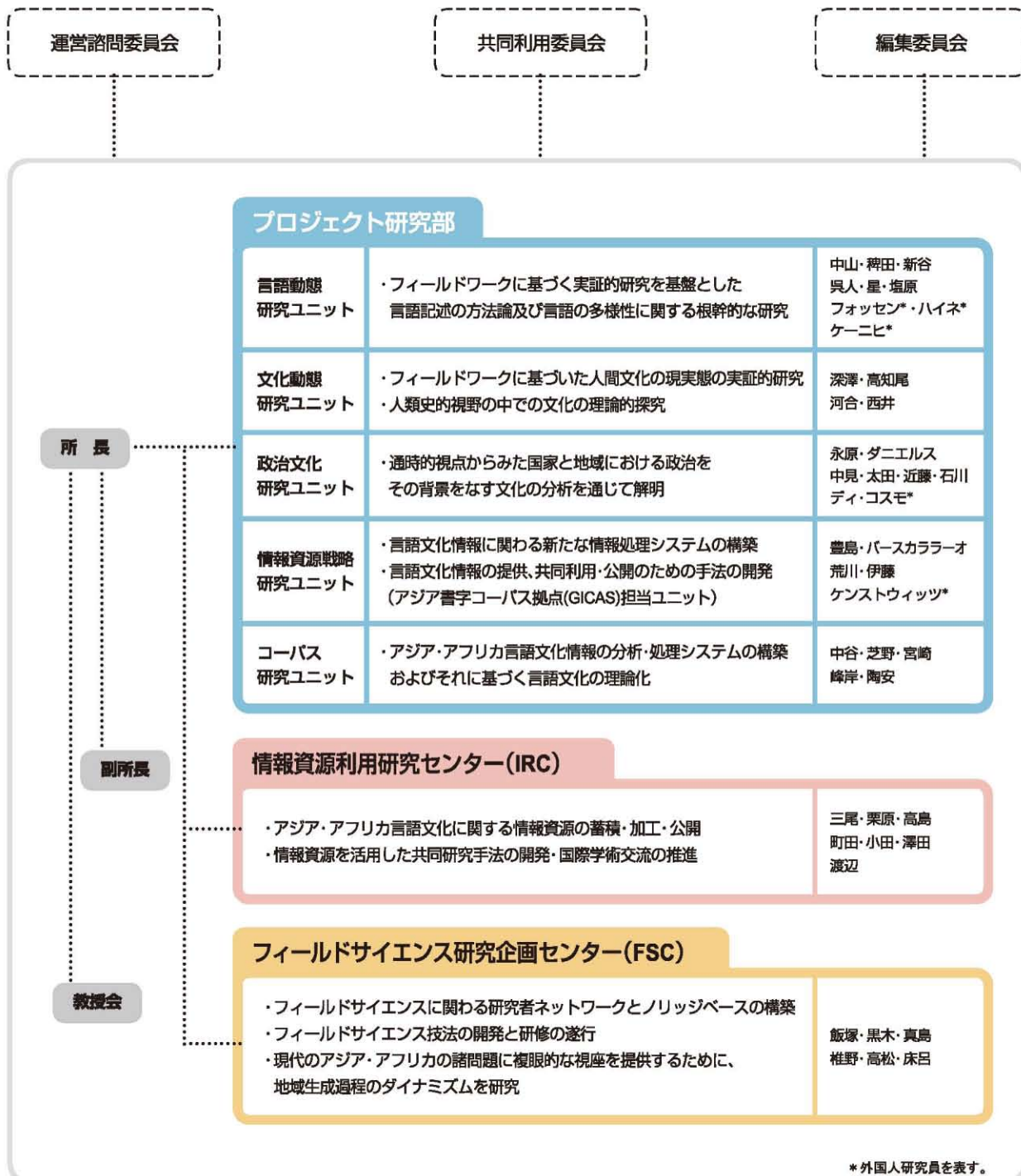
■ 国内外の後継研究者の養成に努めるため、研究所の創設以来の歴史を持つ言語研修・研究技術研修・出版・広報活動の、いっそうの充実を図る。

AA研で行われている様々な研究活動が、上記の基本目標のどれにかかわるものとして位置づけられているかを示したのが、下の図です。





研究組織構成



■人員構成

区分	教授	准教授	助教	外国人研究員	非常勤研究員・特任研究員	共同研究員	フェロー	ジュニアフェロー	計
現員	18	17	3	5	9	434	6	10	502

・共同研究員は延数 ・フェローは日本学術振興会PDを含む(2009年5月1日現在)



研究・運営体制

全国共同利用研究所である本研究所は、外部の委員を含む諸委員会を設置し、研究者コミュニティの意見を反映させ、開かれた研究・運営体制を組んでいます。

■運営諮問委員会

所長の諮問に応じ、本研究所の運営の基本的・長期的方針など重要事項を審議する委員会です。外部の委員によって構成されます。

2009年4月～2010年3月の運営諮問委員は次のとおりです。

- 岩下 明裕 (北海道大学スラブ研究センター長)
- 上野 善道 (東京大学大学院人文社会系研究科教授)
- 倉沢 愛子 (慶應義塾大学経済学部教授)
- 小泉 潤二 (大阪大学理事・副学長/附属図書館長)
- 瀬川 昌久 (東北大学東北アジア研究センター教授)
- 竹中 英俊 (東京大学出版会編集局長)
- 立本 成文 (総合地球環境学研究所長)
- 長野 泰彦 (国立民族学博物館教授)
- 原 ひろ子 (城西国際大学客員教授)
- 水島 司 (東京大学大学院人文社会系研究科教授)
- 渡邊 興亜 (総合研究大学院大学監事)

■共同利用委員会

本研究所の共同利用にかかわる事項を審議する委員会です。共同利用機能の運用を、研究者コミュニティからみて透明な仕方で行うために設けられたものです。親委員会と、研修および海外学術総括班に関する事柄を行う2つの専門委員会から成っています。

2009年4月～2010年3月の共同利用委員は次のとおりです。

□共同利用委員会(親委員会)

- 北川 勝彦 (関西大学経済学部教授)
- 栗田 博之 (東京外国語大学院総合国際学研究院教授)
- 倉沢 愛子 (慶應義塾大学経済学部教授)
- 栗本 英世 (大阪大学グローバルコラボレーションセンター長)
- 庄垣内 正弘 (京都産業大学文化学部客員教授)
- 水島 司 (東京大学大学院人文社会系研究科教授)
- 林 徹 (東京大学大学院人文社会系研究科教授)
- 横山 伊徳 (東京大学史料編纂所教授)
- 飯塚 正人、栗原 浩英、永原 陽子、稗田 乃、三尾 裕子 (以上、AA研)

□研修専門委員会

- 岸田 文隆 (大阪大学大学院言語文化研究科教授)
- 高橋 明 (大阪大学世界言語研究センター長)
- 伊藤 智ゆき、近藤 信彰、澤田 英夫、新谷 忠彦、高島 淳、中山 俊秀、稗田 乃、町田 和彦、峰岸 真琴、渡辺 己 (以上、AA研)

□海外学術総括班専門委員会

- 伊藤 元己 (東京大学大学院総合文化研究科教授)
- 梅崎 昌裕 (東京大学大学院医学系研究科准教授)
- 木村 秀雄 (東京大学大学院総合文化研究科教授)
- 河野 泰之 (京都大学東南アジア研究所教授)
- 佐藤 洋一郎 (総合地球環境学研究所教授)
- 曾我 亨 (弘前大学人文学部准教授)
- 高樋 さち子 (秋田大学教育文化学部准教授)
- 星野 洪郎 (群馬大学大学院医学系研究科教授)
- 本山 秀明 (国立極地研究所教授)
- 安成 哲三 (名古屋大学地球水循環研究センター教授)
- 椎野 若菜、真島 一郎 (以上、AA研)

■編集委員会

研究所の出版・広報の方針の設定及び出版物の審査などに関して所長が必要と認める事項について、所長の諮問に応えます。

2009年4月～2010年3月の委員は次のとおりです。

上岡 弘二 (東京外国語大学名誉教授)
梶 茂樹 (京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科教授)
鷹木 恵子 (桜美林大学人文学系教授)
石川 登 (京都大学東南アジア研究所准教授)
小谷 汪之 (東京都立大学名誉教授)
新免 康 (中央大学文学部教授)
河合 香吏、高松 洋一、クリスチャン・ダニエルス、
豊島 正之、稗田 乃、真島 一郎 (以上、AA研)

■海外研究拠点に関する委員会

レバノン共和国ベイルート市に設置する中東研究日本センター(JaCMES)の活動について、重要な事項を審議するための専門委員会および国際的な視点から助言を得るための国際諮問委員会が設置されています。

□中東研究日本センター専門委員会

(2009年4月～2010年3月)

奥田 敦 (慶應義塾大学総合政策学部教授)
私市 正年 (上智大学アジア文化研究所教授)
酒井 啓子 (東京外国語大学大学院総合国際学研究院教授)
谷口 淳一 (京都女子大学文学部准教授)
長沢 栄治 (東京大学東洋文化研究所教授)
飯塚 正人、黒木 英充 (以上、AA研)

□中東研究日本センター国際諮問委員会

(2009年2月～2010年3月)

Abdul-Rahim Abu-Husayn (Professor, Faculty of Arts and Sciences, American University of Beirut)
Massoud Daher (Professor, Faculty of Literature and Human Sciences, Lebanese University)
Khalil Karam (Vice-President, Saint Joseph University)
黒木 英充 (AA研)



役職・所内委員

■所長・副所長・センター長等 (任期: 2009年4月~2011年3月)

所長(併任): 栗原 浩英

副所長(併任): 飯塚 正人

情報資源利用研究センター長(併任): 三尾 裕子

フィールドサイエンス研究企画センター長(併任): 飯塚 正人

(在レバノン)中東研究日本センター長(併任): 黒木 英充

(在マレーシア)コタキナバル・リエゾンオフィス長(併任): 床呂 郁哉

■所内委員会 (任期: 2009年4月~2011年3月)

□企画運営委員会

(AA研の諸活動に関する基本の方針を検討)

栗原 浩英(委員長)

飯塚 正人

黒木 英充

高島 淳

西井 涼子

深澤 秀夫

町田 和彦

三尾 裕子

□将来計画検討委員会

(AA研の将来計画に関して審議・企画)

西井 涼子(委員長)

飯塚 正人

太田 信宏

栗原 浩英

中山 俊秀

星 泉

真島 一郎

三尾 裕子

□自己評価委員会

(AA研の研究教育水準の向上を図り、その目的および社会的使命を達成するため、研究教育活動等の状況について自ら点検および評価を行う)

高島 淳(委員長)

飯塚 正人

小田 淳一

栗原 浩英

近藤 信彰

豊島 正之

永原 陽子

稗田 乃

三尾 裕子



共同研究

人と人をつなぎ知と知をつなぐ場

■AA研の研究スタッフは、アジア・アフリカ地域の人々の営みを支える言語と、人々が生み出す多彩な文化を研究対象とする人文科学諸分野の研究者です。それぞれの分野でフィールド調査に根ざした研究を行いつつ、研究ユニットかセンターのいずれかに所属して、所内での共同研究を行います。研究スタッフはまた、短期共同研究員の受け入れや、共同研究プロジェクトを組織することにより、所外の研究者との共同研究を展開します。共同研究プロジェクト▶ p.8

■共同研究の場は国内にとどまりません。国際的な学術交流を推進するため、AA研は次のような活動を行っています。

●シンポジウム／ワークショップの開催

先端的な研究を行っている国内外の研究者を発表者やコメンテーターとして招き、シンポジウムやワークショップを開催しています。▶ p.20

●海外研究者の招へい

海外からアジア・アフリカの研究者を外国人客員として招へいしています。また、日本学術振興会や国際交流基金の招へい計画などで来日する海外の研究者、ならびに国内の研究者をフェローとして積極的に受け入れています。▶ p.43

●国際学術協定の締結

海外の研究機関と協定を結び、研究資料・情報の交換、研究者の相互交流、共同研究調査などの国際的な学術交流を推進しています。▶ p.44

●海外研究拠点の設置

レバノンのベイルートに中東研究日本センター (JaCMES) を、マレーシアのコタキナバルにリエゾンオフィスを、それぞれ設置し、現地における共同研究の拠点としています。▶ p.17

■研究の基礎をなすフィールド調査を「フィールドサイエンス」という固有の学問分野にまで昇華させる試みとしての研究手法の開発が、フィールドサイエンス研究企画センター (FSC)の活動目的の1つとして行われています。▶ p.15

■研究の蓄積のないアジア・アフリカの言語文化に関する資料を収集し、それらの研究を促進するため、研究者をアジア・アフリカ諸国およびそれらの旧宗主国などに計画的に派遣しています。▶ p.45

■研究所のスタッフが代表者となり、外部の競争的資金を受けて活動している大型の研究・教育プロジェクトとして、次のようなものがあります。

●中東イスラーム研究教育プロジェクト (MEIS) ▶ p.16

●東南アジアのイスラーム—トランスナショナルな連関と地域固有性の動態 (ISEA) ▶ p.18

●急速に失われつつある言語多様性に関する国際研究連携体制の構築 (言語ダイナミクス科学研究プロジェクト) (LingDy) ▶ p.19

●コーパスに基づく言語学教育研究拠点 (CbLLE) ▶ p.28

●その他競争的研究経費による研究 ▶ p.47



共同研究プロジェクト

全国共同利用研究所である本研究所にとって、所員が所外の研究者とともに推進する共同研究プロジェクトは、中核をなす研究活動のひとつと言えます。

年に1度、外部の審査員を交えた共同研究プロジェクト発表会が開かれ、進行しているプロジェクトの研究実績や成果公開のしかた、新規プロジェクト計画の研究上の意義や実行可能性についての審査が行われます。

プロジェクト名	年度	主査	人数			主に関連する研究ユニット/センター	
			所内	所外	合計		
言語の構造的多様性と言語理論 —「語」の内部構造と統語機能を中心に(重点共同研究プロジェクト)	'05-'09	中山 俊秀	7	16	23	言語動態	p.9
ムスリムの生活世界とその変容—フィールドの視点から *1	'05-'09	飯塚 正人	7	41	48	FSC	p.9
マルセル・モース研究—社会・交換・組合	'06-'09	真島 一郎	2	8	10	FSC	p.9
表象に関する総合的研究	'06-'09	高知尾 仁	3	8	11	文化動態	p.9
東アジアの社会変容と国際環境	'06-'10	中見 立夫	3	36	39	政治文化	p.10
タイ文化圏における山地民の歴史的研究	'06-'10	クリスチャン・ダニエル	3	14	17	政治文化	p.10
遼・金・西夏に関する総合的研究—言語・歴史・宗教—	'07-'09	荒川 慎太郎	2	20	22	情報資源戦略	p.10
ペルシア語文化圏の歴史と社会 *1	'07-'09	近藤 信彰	3	29	32	政治文化・FSC	p.10
「シングル」と社会 —人類学的研究	'07-'09	椎野 若菜	2	18	20	FSC	p.11
「もの」の人類学的研究—もの、身体、環境のダイナミクス	'07-'09	床呂 郁哉	4	20	24	FSC	p.11
総合人間学の構築	'07-'09	中谷 英明	7	30	37	コーパス	p.11
脱植民地化の双方向的歴史過程における「植民地責任」の研究	'07-'09	永原 陽子	2	30	32	政治文化	p.11
社会空間論の再検討—時間的視座から	'07-'09	西井 涼子	5	17	22	文化動態	p.12
言語接触と系統継承: 大湖地域から南部アフリカにかけて話されているバンツ—諸語と隣接言語の記述研究	'07-'09	稗田 乃	2	16	18	言語動態	p.12
アジア・アフリカ地域におけるグローバル化の多元性に関する人類学的研究	'08-'10	三尾 裕子	2	8	10	IRC	p.12
宣教に伴う言語学	'09-'11	豊島 正之	2	6	8	情報資源戦略	p.12
人類社会の進化史的基盤研究(2)	'09-'11	河合 香史	5	15	20	文化動態	p.13
朝鮮語歴史言語学のための共有研究資源構築	'09-'11	伊藤 智ゆき	1	16	17	情報資源戦略	p.13
チベット=ビルマ系言語から見た文法現象の再構築2: 文の特徴付けと下位分類	'09-'11	澤田 英夫	3	12	15	IRC	p.13
インドネシア在地文書研究プロジェクト	'09-'11	宮崎 恒二	1	4	5	コーパス	p.13
マレー世界における地方文化 *1 *2	'05-'09	新井 和広	3	25	28	コーパス・FSC	p.14
漢字字体規範史研究 *2	'07-'09	石塚 晴通	2	7	9	情報資源戦略	p.14
語彙と文法 *2	'07-'09	梶 茂樹	4	6	10	情報資源戦略	p.14
多言語状況の比較研究 *2	'08-'10	砂野 幸稔	2	32	34	言語動態	p.14
計(延べ)			77	434	511		

*1 「中東イスラーム研究教育プロジェクト」(p.16)とも関わりを持つ。 *2 所外研究者を主査とする。

言語の構造的多様性と言語理論 —「語」の内部構造と統語機能の研究

(主査：中山俊秀)

プロジェクトの目的：本プロジェクトでは、形式的単位としての「語」が通言語的に見せる構造的多様性(内的構造の組み立て方・複雑さについての多様性)および機能的多様性(統語法との間の役割分担のあり方の多様性)の幅を探る。さらに、そこでの議論を基盤に、文法システムにおける形態法の位置づけ、形態法と統語法との関係という一般言語理論上の問題を考えていく。

これまでの成果：2007～8年度にかけては特に品詞分類の形態統語的基盤の通言語的多様性に焦点を当てて議論を重ねた。その成果は日本言語学会大会でのワークショップ企画および学術誌『アジア・アフリカの言語と言語学』3号の特集企画としてまとめ、発表した。

今後の研究予定：プロジェクト最終年度である2009年度には、「語」の通言語的多様性に関するこれまでの議論を総括しつつ、言語構造の中での語の位置づけについて一般化を試みる。

マルセル・モース研究 —社会・交換・組合

(主査：真島一郎)

プロジェクトの目的：本プロジェクトでは、フランス社会学・民族学の基礎をきずいたマルセル・モースの業績を、書評・時事論説・講演録・未定稿なども含めたほぼ全作品について横断的に吟味しながら、個人と国家のはざまに存在するものとして構想された「社会société」とは何であり、また何でなかったのかを、今日の視点から再検討する作業がめざされている。

これまでの成果：書誌学的基礎研究の暫定的な成果として、以下のものをウェブ上で公開している。

<http://www.aa.tufs.ac.jp/~tjun/data/mauss/>

http://www.aa.tufs.ac.jp/~tjun/data/socio/annee_socio.html

今後の研究予定：日本語版『モース・コレクション』全五巻の刊行

ムスリムの生活世界とその変容 —フィールドの視点から

(主査：飯塚正人)

プロジェクトの目的：世界各地のムスリムの生活世界の実態を民族誌的アプローチから探るとともに、比較を通してそれらに見られる共通性・普遍性と地域・時代ごとの特殊性の双方を明らかにする。今日のムスリム社会がイスラーム復興のさまざまな兆候を見せている一方で、近代化・世俗化・グローバル化などの影響も強く受けていることを考慮し、その現代の変容のあり方にも注目しつつ研究を進める。

これまでの成果：2005年度からの4年間で国際ワークショップ2回を含む計11回の研究会を行い、東南アジア島嶼部、南アジア、新疆ウイグル自治区、モンゴル、クルグズ、中東・北アフリカ諸国、ケニア、コモロにおける事例についてそれぞれ詳細に検討したほか、「生活世界」という分析概念の有効性などをめぐる議論を深めた。

今後の研究予定：最終年度となる2009年度も、例年どおり研究会を開催するほか、本プロジェクトが基幹共同研究となっている拠点形成事業「中東イスラーム研究教育プロジェクト」の総括国際シンポジウムにおいて5年間の研究成果を発表する。

表象に関する総合的研究

(主査：高知尾仁)

プロジェクトの目的：このプロジェクトは、まえのプロジェクト「旅と表象の比較研究」を継承しつつ、「人間にとって表象とは何か」という問いに対し、問題提起を行うことを目的とする。主に以下の3点について研究を行う。

(1)「表象としてのX」・Xには、他者、土地、場所、宗教(神、死者等)、自然(風景、動植物等)、政治などが考えられ、それらに関する具体的な研究。

(2)表象に関する理論的、精神史的研究。

(3)表象媒体に関する認知科学的研究。

成果および今後の研究：今年度で、このプロジェクトは終了する。研究成果は、2010年度中に出版する予定である。



共同研究プロジェクト

東アジアの社会変容と国際環境

(主査：中見立夫)

プロジェクトの目的：国際情勢の変化と学術交流の発展によって、東アジア各地域の文書館などに所蔵される一次資料を容易に利用できるようになった。このような研究状況を念頭におきながら、18世紀から20世紀初頭の東アジア世界各地における社会の変容が、外部世界とどのように関連していたかという問題を中心にすえ、文書史料によりそれがどこまであきらかにできるか検討する。

これまでの成果：年二回、毎回テーマをかえながら、海外からの報告者もまじえ、シンポジウム形式で研究会を開催し、『東アジア史資料叢刊』などの出版物も刊行している。2008年度は、戦前期のハルビン社会の異種混合性をテーマとした、「ハルビン—異種混交の街—」、八旗制度を検討した、「清朝社会の多様性をさぐる」両国際研究セミナーを開催した。

今後の研究予定：同様の形式で研究会を開催するが、東アジアに関する史料と研究情報の開かれたフォーラムをめざす。とくに東アジア諸地域における「中国」という概念の再検討が中心課題である。

遼・金・西夏に関する総合的研究

—言語・歴史・宗教—

(主査：荒川慎太郎)

プロジェクトの目的：10-12世紀の中国に成立した特異な国家群、遼・金・西夏の研究は、契丹語・西夏語など各国語独自の文字解読の進展、新出土資料の考古学的知見などにより、現在新たな局面を迎えつつある。本プロジェクトは、言語・歴史・宗教という広い領域に亘る研究者をメンバーとし、最先端かつ総合的な研究を目指している。また「遼金西夏史研究会」とも連携して研究発表・一般公開を行なう。

これまでの成果：荒川慎太郎・高井康典行・渡辺健哉編、『遼金西夏研究の現在』1(東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所、2008)

今後の出版予定：荒川慎太郎・高井康典行・渡辺健哉編、『遼金西夏研究の現在』2、3(東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所、2009、2010)

http://www.h7.dion.ne.jp/~qo-sez/index_LiaoJinXixia.html

タイ文化圏における山地民の歴史的研究

(主査：クリスチャン・ダニエルス)

プロジェクトの目的：タイ文化圏の歴史においては、タイ系民族の盆地政権がその周辺の山岳地帯に居住する山地民を緩やかに「統治」した。これまで研究者は、盆地政権中心にこの地域全体の歴史を再構築してきたが、山地民の歴史的役割を重要視してこなかった。本プロジェクトの目的は以下の通りである。

(1)山地民の歴史的役割を明らかにして、その役割を総合的に概念化することによってタイ文化圏の歴史的形を再解釈することである。

(2)夥しい数の民族集団が居住する地方はそれぞれ異なるが、その歴史体験の共通性を明確にする視点を採用する手法によって、タイ文化圏の歴史に対する統一的な理解を深化させることである。

これまでの成果：新谷忠彦著『タイ族が語る歴史：「センウィー王統紀」「ウンボン・スイーポ王統紀」』(2008)、チャレ著片岡樹編訳『ラフ族の昔話—ビルマ山地少数民族の神話・伝説』(2008)、SHINTANI Tadahiko, *The Palaung Language: Comparative Lexicon of its Southern Dialects* (1)(2008)、SHINTANI Tadahiko, *The Mun Language of Funning County: Its Classified Lexicon*(2008)、山田敦士著『スガンリの記憶—中国雲南省ワ族の口頭伝承』(2009)

ペルシア語文化圏の歴史と社会

(主査：近藤信彰)

プロジェクトの目的：「ペルシア語文化圏」は歴史上のいずれかの時期にペルシア語を文学語、行政語として用い、ペルシア語文化の影響を強く受けた地域を指す。この概念を用いることで、中東、中央アジア、南アジアという大きな地域区分、アラブ、イラン、トルコという専門分野、そして国民国家を相対化した歴史像を描くことを目指す。

これまでの成果：2008-09年度に以下の3冊を刊行した。

1. Omid Reza'i, *Introduction to Shari'a Documents from Qajar Iran* (2008) 2. Timur Beisembiev, *Annotated indices to Kokand Chronicles* (2008) 3. ウテミシュ・ハージ著、川口琢司・長峰博之編『チンギズ・ナーマ』(2008)。

今後の研究予定：引き続き、年3回の研究会を開催し、さまざまな角度から「ペルシア語文化圏」という概念に関して議論を深める。本年度終了後、成果報告の論集を刊行する予定。

http://www.aa.tufs.ac.jp/fsc/meis/jrp_PerC.html

「シングル」と社会 一人類学的研究

(主査：椎野若菜)

プロジェクトの目的：グローバル化が進み人の動き、さまざまな価値観が交錯する現代では、結婚という制度からみれば「シングル」ではなくとも、地理的や社会的観点からすれば孤立している状態が多くある。本研究では出稼ぎ者、高齢者、ジェンダー・マイノリティといった人々も含み「シングル」として注目することによって社会、人間関係のありようを追求する。

これまでの成果：地域多様性、父系／母系などの社会組織、歴史的背景、生業や生態環境の違いなどを超えてシングルに注目して数々の研究発表を行い、議論を重ねてきた。2008年11月の比較家族史学会においてミニ・シンポジウム「『シングル』の視点で社会をみる人類学的試論」を企画実施。AA研広報誌『Field+』創刊号の巻頭特集「『シングル』で生きる」(2009年1月発行)を担当。

今後の研究予定：「シングル」という視点から社会を、人間の営みを見る有効性を地域的特性、歴史、経済を考慮にいれながら最終年度の総括をしていく。

<http://single-ken.aacore.jp/>

総合人間学の構築

(主査：中谷英明)

プロジェクトの目的：人文、自然両科学の成果を総合し、人間のあり方を深く理解して、よりよい未来社会の構想に資することを目的とする。人間を生物として、また現世人類として捉え直し、十萬年来の神話、宗教、古典を俯瞰しつつ、人のこころと、人が作る社会の本質を理解する。それは、環境、紛争、貧困、こころの荒廃等、現代世界が直面する諸問題を解決するための原理的諸条件を明らかにするであろう。生きるにあたいする生とは何か、そのためにはいかなる社会がふさわしいか、を考察する基盤を提供したい。

これまでの成果：『総合人間学叢書』全4巻(06年～08年)の刊行。「総合人間学国際シンポジウム」5回(05年～09年)、「パリ・ワークショップ」2回(08年、09年)の実施。フランス人間科学館(パリ)との学術協力協定(05年～10年)による総合人間学共同研究の実施。外国人研究員(07年D. Lestel, 08年M. Witzel, 09年J.L. Dessalles)の招聘。これらの成果の紹介は、<http://www.classics.jp/GSH/>にある。

今後の研究予定：共同研究論文集の刊行。第6回東京シンポジウム、第3回パリ・ワークショップの開催。

「もの」の人類学的研究 —もの、身体、環境のダイナミクス

(主査：床呂郁哉)

プロジェクトの目的：本プロジェクトは人間世界を取り巻く多様な「もの」をテーマとして人類学的視点から研究を行うものである。特に本プロジェクトではアジアやアフリカをはじめ各地で豊富な調査経験を持つ複数の人類学や関連分野の研究者の参加と協力によって、「もの」と人間社会との複雑で多様な関係について、環境や身体というキーワードを参照しながら学際的な共同研究として実施するものである。

これまで2007年度に計3回、2008年度に計5回の研究会を開催した。研究会で取り上げられたテーマはアジアやアフリカを中心とする世界各地における「もの」と身体との関係、ものづくりにおける身体技法、「もの」と環境の関係、「もの」の展示と表象など多岐にわたる。またこの研究会のうち一回は実際にローカルな「もの」の生産と消費がどのように展開しているのかを現地に見学することを兼ねて現地沖縄において実施された。2009年度は計5回程度の研究会実施を予定しており、これまでの議論を踏まえて各地における「もの」の生産や流通、消費に関する民族誌的な比較研究を継続すると同時に「もの」研究の理論的枠組みを議論していくことを目指す。

脱植民地化の双方向的歴史過程における 「植民地責任」の研究

(主査：永原陽子)

プロジェクトの目的：1990年代ごろから世界の各地で、植民地支配や奴隷貿易・奴隷制の過去を見直すとともにその歴史的被害を現在のものととらえ、「謝罪」や「償い」を求める動きが顕在化している。本プロジェクトでは、そのような動きを様々な主体の歴史認識の変化ととらえ、新しい脱植民地化研究を目指している。

これまでの成果：これまでに計7回の研究会をもち、東アジア、ビルマ、プエルトリコ、イタリア、エチオピア、モザンビーク、台湾、イギリス、アメリカ合衆国、ケニアなどの事例を報告しあうとともに、2008年12月には公開国際ワークショップ「奴隷制・植民地主義の『罪』をめぐる体験・記憶・償い」を開催し、幅広い研究者と意見交換した。また、前身プロジェクト(「『植民地責任』論からみる脱植民地化の比較歴史学的研究」2004-06年度)の成果とあわせて、2009年3月には「『植民地責任』論—脱植民地化の比較史」を出版した。



共同研究プロジェクト

社会空間論の再検討—時間的視座から

(主査：西井涼子)

プロジェクトの目的: 「社会空間」とは、実践の場に展開している、異質な関係性や志向や行為の重層性・変容の過程を捉えることをめざす。日常的実践の場とは、人と人が共に生活し相互作用する場であり、身体として生きざるをえない人間がある場所、人、モノとの係わり合いの中で活動する場である。本共同研究会では「社会空間」論を考察する上で、時間的視座を導入することによって人類学におけるフィールドワークからの思考にとって、何が新たに明らかになるのか、またさらには実践の場に焦点化するマイクロ分析が人間認識にとってどれほどの生産的展望を出すことができるのかという二つの問いを念頭に、共同研究によって新たな人類学的な理論的展望を拓くことをめざす。

これまでの成果: ウェブに、毎回の研究会での発表要旨を掲載している。

今後の研究予定: 年間数回の共同研究会を計画している。来年度ははじめのプロジェクト出版物刊行に向けての討議を行なう。

アジア・アフリカ地域におけるグローバル化の多元性に関する人類学的研究

(主査：三尾裕子)

プロジェクトの目的: 近年のヒト、モノ、情報の移動や越境現象は、「グローバル化」と名付けられ、政治学・経済学などの社会科学等での研究が興隆している。しかしながら、従来の研究の多くは、「グローバル化」に関し、いわば世界システム論が言う「中心／周辺」ないしは「南北問題」的な二項対立図式を前提としたものが主流であった。そこで、本プロジェクトでは、総論的、概念的に語られることの多かった「グローバル化」について、アジアとアフリカにおける「グローバル化」をめぐる多様な複雑な諸相について具体的、実証的に解明していくことを目指す。

これまでの成果: ウェブページに、毎回の研究会での発表要旨を報告している。

今後の研究予定: 年3～4回のプロジェクト研究会を計画。うち1回は、グローバル化の具体的な進行を現場で考察する、実地研究を含む研究会を開催予定。

言語接触と系統継承：大湖地域から南部アフリカにかけて話されているバンツ語諸語と隣接言語の記述研究 (主査：稗田乃)

プロジェクトの目的: 大湖地域から南部アフリカにかけて話されているバンツ語諸語とその隣接諸言語を、既に現地調査を行った研究者を中心に、それらの言語の記述的研究の諸問題について明らかにするとともに、これまで各研究者が個別に得た成果を共同研究において総合し、討議することにより、この地域に特徴的な言語現象(音韻論的、形態論的、統語論的特徴)を探り出し、それらの言語現象をもたらした原因を探る。

これまでの成果: プロジェクト出版物: 1. S. Kaji, *A Rutooro Vocabulary* (2007), 2. A. M. Mangulu, *Aspects du Bongili de la Sangha-Likouala, suivis de l'esquisse du parler Enga de Mampoko, Lulonga* (2008)

今後の研究予定: 年間3回の共同研究会とプロジェクト出版物を予定。

宣教に伴う言語学

(主査：豊島正之)

プロジェクトの目的: 16～17世紀イエズス会による「宣教に伴う言語学」に伴う辞書編纂史・語彙研究史の研究を目的としており、特に多言語・対訳辞書等の基礎資料の共同しての整備、原本の書誌調査結果の共有、討議による検討を主とする。研究発表会の開催は主眼ではなく、寧ろ辞書類の入力結果の分担校正、オンライン辞書の検索によるバグ取り、書誌報告の(原所有館に対する)報告書の作成、などを主として共同研究を進める。

これまでの成果: 当該時代に実際に宣教に伴う言語研究で利用されていた多言語辞書類のオンラインデータベース。全て全文検索可能であり、原典がプロジェクトメンバー所蔵のものは、原典当該頁の精密pdfも参照可能。Cardoso羅葡・葡羅辞書(1592), Barbosa葡羅辞書(1611), Calepinus多言語辞書(1592), Nizolius羅辞書(1595), 日本イエズス会版羅葡日対訳辞書(1598)[校正中], 日葡辞書(1603)[校正中], 等。これらには、Freire辞書(1954)に基づく異形態フィルタも試行中。<http://joao-roiz.jp/LGR/> その他、国内・国際誌への査読論文の刊行、及び国際学会への招待講演・招待討論者など。

今後の研究予定: 2010年3月にMissionary Linguistics 国際会議をAA研にて開催予定。上記データベース類の改善・拡張。

<http://www.joao-roiz.jp/>

人類社会の進化史的基盤研究 (2)

(主査：河合香史)

プロジェクトの目的: 本プロジェクトは、2005～2008年度に「集団」をテーマとして開始された長期的プロジェクト「人類社会の進化史的基盤研究(1)」に続く第2弾として「制度」をテーマとするものである。メンバーにはこれまでの人類学および霊長類学の研究者に言語学の専門家を加え、「制度」の言語起源論を相対化し、「制度」なるものの生成過程を人類進化史上に位置づけることを目的とする。

今後の研究予定: 3年計画、年間5回の研究会を予定している。ヒトを含む霊長類の「集団」には共存のためのさまざまな原理が存在する。「制度は言語のうえに成立する」という一般に当然と思われている命題にたいして、音声言語をもたないヒト以外の霊長類に「社会」を認め、社会構造論や家族起原論を展開してきた霊長類学の知見や理論によってこれを相対化する。そのうえで、当該社会の成員の行為・行動のなかに「制度」の前駆的なありようを認め、言語を前提としない制度の可能性とその進化史的基盤を追究する。

チベット=ビルマ系言語からみた文法現象の再構築2：文の特徴付けと下位分類

(主査：澤田英夫)

プロジェクトの目的: このプロジェクトは、チベット=ビルマ(TB)系諸言語の文が示す構造と機能の諸相を研究テーマとする。メンバーが各自の研究によって得た対象言語の文に関する言語事実と、それを記述するに当たっての視野の広がり・深さを共有することで、さらなる記述を推し進め、ひいてはTB系言語の文に関する知見をより豊かなものにするを目指す。

今後の研究予定: 今年度計3回の開催を予定している研究会で、メンバー全員が各自の対象言語の文について、発話行為タイプからみた動詞述語文の下位分類、非動詞述語文の種類、コピュラの分布などの点に着目して報告を行う。

次年度は、今年度の報告の内容をもとに、TB系言語の文に関する言語現象を観察し記述する際にどのような概念や要因を考慮に入れる必要があるかについての議論を進める。各報告の要旨など研究会の内容はウェブページで随時公開し、最終年度後にTB系言語の文に関する報告書を出版する。

朝鮮語歴史言語学のための共有研究資源構築

(主査：伊藤智ゆき)

プロジェクトの目的: 本研究プロジェクトでは、朝鮮語歴史言語学を専門とする研究者が共同で、研究資源共有のための技術開発、構築手法の研究を進めながら、主としてwwwサイトを通じ研究資源・成果を公開していくことで、朝鮮語史研究の更なる発展と、広く朝鮮語研究・言語学研究一般への国際的貢献を目指す。

今後の研究予定: a. 定期研究会開催、b. 共同研究員による研究資料構築と、wwwサイト上での公開・更新作業、c. 形態素分析やKWIC索引作成のための共通入力方式・分析方法の検討、プログラム作成、d. 論文レポジトリの検索のための同義語・類語辞書の制作、e. 朝鮮語諸方言資料の収集・統合作業。

<http://www.kriling.com/>

インドネシア在地位文書研究プロジェクト

(主査：宮崎恒二)

プロジェクトの目的: 未開拓のインドネシアの現地語文字資料の利用方法を開拓することにより、従来の現地調査、植民地文書調査と組み合わせた新たな研究手法の確立を目指す。また、国内外の研究者のネットワーク化を図ると共に、インドネシア諸地域の研究を推進する若手研究者の育成も目指す。

今後の研究予定: 海外の研究者と連携し、ジャワ語・ジャワ文字による写本を対象としたデータベース化、コーパス構築を進める。同時に、ジャワ語資料を用いた歴史、文化、社会、言語の研究の可能性を追求する。さらに、個別文化の研究にとどまらず、広く文字文化一般、そして口承伝統と文字文化の関係についての考察を進める。三年間のプロジェクト期間を、インドネシア諸語による在地位文書の全体像の把握の第一段階と位置づけ、終了後は他のインドネシア諸語による資料の開拓の可能性を検討する。



共同研究プロジェクト

マレー世界における地方文化

(主査: 新井和広 (慶応義塾大学))

プロジェクトの目的: 国家としてのインドネシア、マレーシアを包含する広義の「マレー世界」の多様な地方文化に関する人類学的な研究はこれまでも行われてきた。しかし、多くの地方に残る現地語文書に関しては、人類学、歴史学いずれの分野からも着目されていない。これらの文書の中には、各地方の文化の形成や変遷に関する興味深い資料が含まれており、あらたな資料の宝庫である。本計画は、これらの文書を中心に、地方文化の形成過程に関する研究を行うものである。2009年度においては東南アジア各地で出版されたジャウィ定期刊行物や写本等、文書史料に関連する研究会を数回開催する。

これまでの成果: Kawashima Midori, Arai Kazuhiro, Yamamoto Hiroyuki, compilers, *Proceedings of the Symposium on Bangsa and Umma: A Comparative Study of People-Grouping Concepts in the Islamic Areas of Southeast Asia* (2007).

Titik Pudjiastuti. *Babad Arung Bondhan: Javanese Local Historiography* (2008).

今後の研究予定: ジャウィ定期刊行物巻頭言の翻字・翻訳・解題を行う。

語彙と文法

(主査: 梶茂樹 (京都大学))

プロジェクトの目的: 本プロジェクトでは、世界の様々な言語の辞書・語彙集を作成している研究者が、文法構造など言語の特徴性をその語彙構造を通して考察しようとするものである。具体的には、自分で作った、あるいは作成中の辞書・語彙集を題材に、見出し語の選定、記述内容などが、その言語のどのような特徴を考慮に入れてのことかを明らかにし、語彙と文法との関係を考察する。

これまでの成果: Kaji, Shigeki, *A Rutooro Vocabulary* (2007). Kari, Ethelbert Emmanuel, *Degema-English Dictionary with English Index* (2008).

漢字字体規範史研究

(主査: 石塚晴通 (北海道大学名誉教授))

プロジェクトの目的: 本プロジェクトは、「漢字字体規範データベース」HNGの構築・拡張を行なう。これは、漢字の字体に規範の転換をもたらす歴史上の影響力の強い文献、及びその規範を忠実に反映した文献である「漢字字体規範史料」を選定し、www上のオンラインデータベースとして構築するもので、既に3年以上に亘って <http://www.joao-roiz.jp/HNG/>でサービス中であり、2006年6月には、「東洋文字文化の継承と発展に寄与する優れた業績」であるとして第一回「立命館白川静記念東洋文字文化賞」を受賞している。

これまでの成果: 同上データベース、及び当該データベースを利用して成った学術査読論文、学会への招待講演など。

今後の研究予定: 同上データベースの維持・拡張、それに伴う文献調査等。又、漢字字体規範とその歴史に関する基礎概念を論ずる小冊子(英文)の編集・刊行を予定。

ウェブサイトURL: <http://www.joao-roiz.jp/HNG/>

多言語状況の比較研究

(主査: 砂野幸稔 (熊本県立大学))

プロジェクトの目的: 多言語主義をめぐる議論を生み出したヨーロッパ等の状況と、アジア、アフリカのさまざまな多言語社会の状況を比較検討することで、多言語状況(multilingualism)についての総合的な理解を目指すとともに、言語的多様性と公共空間の形成がどのようにして両立し得るのか、その歴史的社会的諸条件をさぐる。

これまでの成果: 2008年度は三回の研究会を持ち、その報告内容は、研究会のウェブサイトに公開している(<http://aa.multilingualism.googlepages.com/>)。また、成果の一部にあたるアフリカが多言語状況についての研究は、2009年春に『アフリカのことばと社会』(三元社)として刊行された。

今後の研究予定: さまざまに異なった歴史的社会的条件の下におかれた諸社会の多言語状況と諸国家の言語政策について、できる限り数多くの事例を検討することを通じて、多言語社会論の構築に向けた共同研究を進めていく。



フィールドサイエンス研究企画センター (FSC)

■目的

フィールドサイエンス研究企画センター(略称FSC)は、2005(平成17)年度から所内措置により活動を開始、2006(平成18)年4月に正式発足しました。AA研の研究活動の特徴づけてきた臨地調査の手法をより実践的・理論的に洗練して、さまざまな学問の領域を横断する「フィールドサイエンス」という「現地学」を構築するとともに、調査関連データを体系的に蓄積し、臨地調査に関わる研究者間の連携を担うことを目的としています。

■活動の指針

現在、FSCの活動は次の7本の柱からなっています。特に(2)～(4)については、これらを包括する「中東イスラーム研究教育プロジェクト」の事業本部をFSCに置いています。この事業は、現在のアジア・アフリカを俯瞰した際に、中東・イスラーム圏に焦点を当てた研究が極めて重要であるとの認識に立って、2005(平成17)～2009(平成21)年度の文部科学省特別教育研究経費をもつて実施するものです。

(1)研究手法の開発

海外での臨地調査に関わる手法を実践的・理論的に開発することを目標とします。「フィールドサイエンス・コロキウム」という研究会を随時開催し、様々な専門分野の研究者とともに、調査手法やデータの意味づけ、さらに研究者と研究対象の関係性の問題などを集中的に議論し、情報・知識・経験の共有化を目指します。

(2)大型共同研究プロジェクトの実施

「ムスリムの生活世界とその変容」プロジェクトなど、中東・イスラーム圏を中心にグローバルな視野を持つ複数の共同研究プロジェクトを相互に関連させつつ推進します。

(3)研修事業

若手研究者育成のため、研究手法に関わる研修「中東・イスラーム研究セミナー」(7月・12月)、「中東・イスラーム教育セミナー」(9月)、「オスマン文書セミナー」(12月)を、さらに海外研究拠点を利用した若手研究者報告会(11月)を実施します。博士論文執筆予定レベルの若手研究者や大学院生の研修生を公募し、地域や専攻分野の枠を超えた学際交流の場を提供します。

(4)現地研究拠点の設置

上記(1)～(3)の活動を効果的に遂行するため、レパノンのペイルートに設置した研究拠点「中東研究日本センター」、マレーシアのコタキナバルに設置した研究拠点「コタキナバル・リエゾンオフィス」を中心に、中東と東南アジアのイスラーム圏との学術交

流を推進し、わが国におけるこの地域の研究の先端的拠点となることを目指します。

(5)ニーズ対応型地域研究の推進

2006(平成18)～2010(平成22)年度文部科学省「世界を対象としたニーズ対応型地域研究推進事業」の1つ「東南アジアのイスラーム」プロジェクトを推進する母体となっています。

(6)海外学術調査総括班

「海外学術調査総括班」は、1975(昭和50)年以来、AA研に事務局をおきつつ、科学研究費補助金・海外学術調査にかかわる研究者間、および研究者と文部省、日本学術振興会の間の情報交換、連絡調整などに当たってきました。例年、6月下旬に「海外学術調査総括班フォーラム」を開催して、ワークショップ、情報交換のための全体会議、地域別分科会を実施しています。FSCが「総括班」の実績を継承し、発展させています。

(7)地域研究コンソーシアムとの連携

「地域研究コンソーシアム」は、地域研究に関わる全国の研究組織のネットワーク形成をめざしています。AA研は拠点組織の1つとして2004(平成16)年のコンソーシアム設立に貢献しました。現在、AA研は幹事組織の1つで、FSCはその連携活動の窓口となっています。

FSC事務局はAA研5階に置かれています。

電話 042-330-5618, 5665

e-mail: fsc_office@aa.tufs.ac.jp

FSCのウェブサイト <http://www.aa.tufs.ac.jp/fsc/> もご覧ください。



海外学術調査総括班フォーラム・ワークショップ風景 2008年6月



フィールドサイエンス研究企画センター (FSC)

中東イスラーム研究教育プロジェクト (略称 MEIS)



本プロジェクトは、中東イスラーム世界の政治・社会・文化に関する研究を積極的に推進するために、2005(平成17)年度から5か年計画でスタートした文部科学省特別教育研究経費による事業です。フィールドサイエンス研究企画センターの基幹プロジェクトの一つに位置づけられ、現地拠点を設置して実施する共同研究を軸に、高度な研究から教育に至る一貫した研究教育プログラムを組織的に展開しています。

本事業では、全国共同利用研究所として創設以来40年にわたって先駆的な中東・イスラーム関係の共同研究を推進し、多大な学術的成果を挙げた本研究所が拠点となり、東京外国語大学の擁する多数の中東・イスラーム研究者が協働し、研究・教育事業を実施しています。一方、イスラーム世界に現地研究拠点を築き、現地研究機関等との共同研究及び若手研究者の育成を行いつつ、日本理解のための研究教育事業も実施しています。

本プロジェクトのスタッフが取り組んでいる主な事業は、次のとおりです。

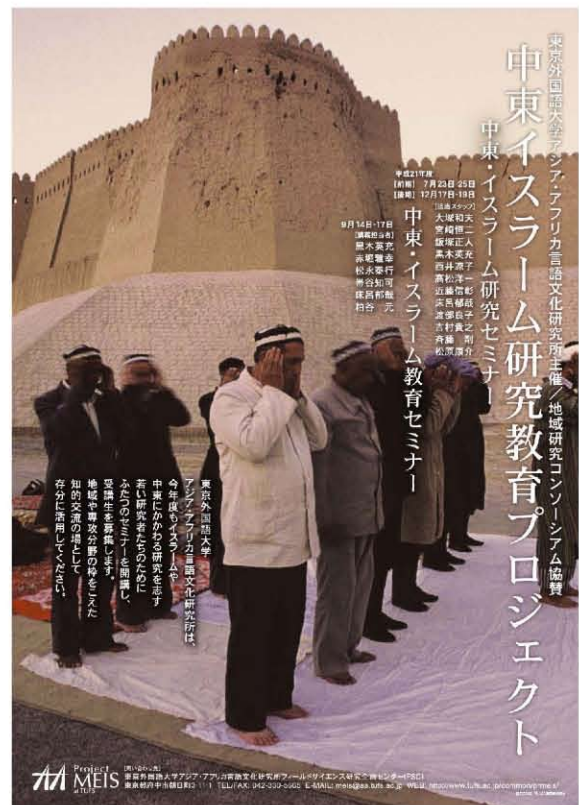
- (1) 現地研究拠点の設置と運営 — レバノンのベイルート拠点「中東研究日本センター (JaCMES)」の設置(2006(平成18)年2月)、マレーシアのコタキナバル拠点「コタキナバル・リエゾンオフィス」の設置(2008(平成20)年3月)とそれぞれの運営(p.17の海外研究拠点を参照)
- (2) 中東・イスラームに関する共同研究プロジェクトの実施(p.8の共同研究プロジェクト一覧を参照)
- (3) 全国の大学院生や博士課程修了者などを対象とした中東・イスラーム研究セミナーと中東・イスラーム教育セミナーの運営(p.27の中東・イスラーム研究セミナー、中東・イスラーム教育セミナーを参照)
- (4) ベイルート現地研究拠点を会場として実施する若手研究者研究報告会の運営(p.27のベイルート若手研究者研究報告会を参照)
- (5) 国内外の研究者を招いた研究会やシンポジウム、アラビア語・ペルシア語・オスマン語・ジャワ語の文献学・文書セミナーの開催
- (6) 19世紀アフガニスタンやエジプトの石版画など貴重資料のデジタル化と公開展示、図録刊行など研究成果の社会還元

(7) 中東の主要新聞の記事の日本語翻訳とそれらのウェブページでの公開

このように多岐にわたる活動を通して、日本における中東・イスラーム研究の全国的な発展や国際的展開に貢献するとともに、若手研究者の育成も進めています。

なお、本プロジェクトのより詳しい説明は、下記のウェブサイトをご覧ください。

<http://www.tufs.ac.jp/common/prmeis/>





フィールドサイエンス研究企画センター (FSC)

海外研究拠点

中東イスラーム研究教育プロジェクトの一環として、AA研は次の2つの研究拠点を海外に設置し、研究活動を国際的に展開しています。

中東研究日本センター

(Japan Center for Middle Eastern Studies 略称JaCMES)



中東研究日本センターは、AA研がレバノンの首都ベイルートに設置した初の海外研究拠点です。2005(平成17)年12月15日にレバノン政府閣議決定による認可を受けて、2006(平成18)年2月1日に開所式を行いました。本センターは、AA研の全国共同利用機能を海外において展開すべく、次のような活動を行います。

(1)若手研究者報告会「日本の中東研究の最前線」

日本の博士課程大学院生や学位取得後の若手研究者が最新の研究報告を行い、レバノンを初めとする中東現地の研究者と直接交流する機会を提供します。

(2)若手研究者の調査派遣

日本の若手研究者を派遣して、現地調査に従事する機会を提供します。

(3)日本・中東関係講演会

日本と中東の関係、日本におけるイスラームの歴史などを専門とする研究者を派遣して講演していただき、交流の歴史と現状を紹介する機会を設けます。

(4)ベイルート学術情報の紹介

ベイルートを中心にレバノンの活発な学術・文化的活動の情報を収集し、ウェブページで公開して紹介しています。

所在地: Japan Center for Middle Eastern Studies (JaCMES)
2nd Floor, Azarieh Building, A2-1, Bashura, Emir Bashir Street, Beirut Central District, LEBANON
Phone/Fax: +961-1-975851
<http://www.aa.tufs.ac.jp/fsc/jacmes/>



中東研究日本センター会議室における研究会風景

コタキナバル・リエゾンオフィス

(Kota Kinabaru Liaison Office, ILCAA-TUFS)

コタキナバル・リエゾンオフィスは、マレーシア・サバ州政府により設立されたサバ開発研究所(The Institute for Development Studies, Sabah)の全面的な協力により、AA研の東南アジアにおける政治・社会・文化に関する総合的学術研究拠点として、2008(平成20)年3月1日、同研究所内に設置されました。サバ州は、ブルネイ、インドネシア、フィリピンなどの東ASEAN成長地域、南シナ海及びインド洋の交差点にあたり、多様な文化の交流の場となっています。アジア海域世界の動態の解明にとって最適な地の利を生かし、マレーシア、日本および関連諸国の研究者とともに多様な国際的共同研究プログラムを推進します。

所在地: Kota Kinabaru Liaison Office, ILCAA-TUFS
Institute for Development Studies(IDS), Suite 7CFO1,
7th Floor, Block C, Kompleks Daramunsing 88739 Kota
Kinabalu, Sabah, Malaysia
Phone : +60-88-246116, 246167, 242871
Fax : +60-88-234707

海外拠点の利用に関する問い合わせ先:
東京外国語大学研究協力課全国共同利用係
Phone: 042-330-5600, 5603
Fax: 042-330-5610



サバ開発研究所前にて
(2008年3月)

コタキナバル・リエゾンオフィス開設
記念ワークショップ
(2008年3月)





フィールドサイエンス研究企画センター (FSC)



東南アジアのイスラーム —トランスナショナルな連関と地域固有性の動態 (略称 ISEA)

本プロジェクトの目的は、東南アジアのイスラームに関して、現地の文脈におけるその固有性のみならず、トランスナショナルなイスラーム主義の諸潮流が現地に及ぼす影響といった、2つのレベルの関係性・動態を明らかにすることです。またその動態が、政治や経済、紛争や平和構築などの公共領域に及ぼす影響について、中東研究者を含む歴史学、人類学、政治学など多様な分野の研究者と実務家との協働によって解明することをめざします。本プロジェクトは文部科学省「世界を対象としたニーズ対応型地域研究推進事業」により、2006(平成18)年10月から4年半にわたり実施するものです。

本プロジェクトの詳細については下記ウェブサイトをご覧ください。

<http://www.aa.tufs.ac.jp/fsc/isea/>



ムスリムの儀礼の一場面
マレーシア・サバ州西海岸のブルネイ系マレー人の村にて。
2006年 床呂都哉撮影

フィールドサイエンス研究企画センター (FSC)



海外学術調査総括班 (略称 OSC)

海外学術調査総括班(The Overseas Scientific Research Coordination Team: OSC)は、AA研所員が培ってきた人文社会系フィールドワークの諸経験をふまえて、フィールドサイエンスの構築可能性の探究と超域的研究ネットワークの確立をめざす事業です。

1975(昭和50)年以来、科学研究費補助金の助成を受け、人文社会系・理工系・医学系・農学系・生命科学系など、さまざまな分野で海外学術調査にたずさわる研究者・研究組織間、また、研究者・研究組織と日本学術振興会(以前は文部省)との間の情報交換や連絡調整に従事してきました。平成17年度からは、事務局をAA研フィールドサイエンス研究企画センター内に置き、活動内容のさらなる拡充につとめています。

本事業の主な活動は次の3つです。

- (1) 海外学術調査の研究組織の代表者を集めた「海外学術調査総括班フォーラム」の開催
- (2) 超域的研究ネットワークの可能性をうらなう現地共同調査の試行
- (3) フィールドサイエンスコロキウムや、フィールドネット研究会など、フィールドサイエンスの構築可能性をさぐる多彩な企画の継続的な開催・運営

なお、国内研究者コミュニティの意見を本組織の具体的な運営に広く採り入れる目的で、AA研では、フィールドサイエンス関連諸分野における第一線の研究者を委員とする、海外学術調査総括班専門委員会(p.4)を設置しています。

詳細については、下記ウェブサイトをご覧ください。

<http://www.aa.tufs.ac.jp/~gisir/index.htm>





急速に失われつつある言語多様性に関する国際研究連携体制の構築

言語ダイナミクス科学研究プロジェクト（略称 LingDy）



世界に7,000弱あるとされる人間の言語は、人間の認知能力と社会活動が生み出す伝え合いの体系がいかにも多様な形を取りうるかを見せてくれます。近年、特に研究未開発の少数言語からのデータが徐々に蓄積されてくるとともに、人間言語に関する一般理論の構築を目指す言語研究の中でも言語の構造的多様性の幅と深さが強く意識されるようになってきました。また、欧米主導の急激な経済グローバル化の中で伝統的言語の大量消滅が世界的に進む今日、言語・文化の多様性の保護・研究を継続的に保障する基盤を構築することが国際的な緊急課題となっています。

本プロジェクトは、こうした学術的、社会的要請に応えるため、文部科学省特別教育研究経費を受け2008(平成20)年度より5カ年計画でスタートし、研究未開発言語のドキュメンテーション研究(語彙、文法、テキスト資料、及び文化・社会的情報の収集を通じた多面的な記録と研究)の活性化・体系化と、構造的多様性と歴史的变化のダイナミクスを踏まえた言語システムに関する総合的研究の構築を、継続的な国際連携体制の下で進めることを目的としています。プロジェクトを支える連携体制は、アジア・アフリカ言語文化研究所を国内とりまとめ機関とし、イギリスのロンドン大学東洋アフリカ学院とドイツのマックス・プランク進化人類学研究所を海外連携拠点として、組まれています。



支えなしに立つ世界最高のトーテムポール(1954年建立,39m)。失われつつある先住民の伝統文化を語る。そして文化を生み出す人間社会の活動を支える言語もまた、残すべき人類の遺産であると言える。(カナダ、ブリティッシュ・コロンビア州、ビクトリアのピーコンヒルパークにて)撮影者：中山俊秀

このプロジェクトで取り組んでいく活動には以下のようなものが含まれます。

■言語多様性に関する先進的研究の推進

- ・研究未開発言語のドキュメンテーション研究の推進
- ・言語多様性研究のための基盤的データのデータベース構築
- ・ドキュメンテーション研究方法論の体系的トレーニングの提供
- ・共同研究研究会、シンポジウムなどを通じた構造的多様性と歴史的变化のダイナミクスを踏まえた言語システムに関する総合的研究の推進

■国際的共同研究インフラの構築と研究交流活性化

- ・ドキュメンテーション研究に関する情報共有と相互支援を目的とした研究者コミュニティの形成
- ・参加型オンライン交流環境の構築とそれによる持続的研究交流のサポート
- ・国際的共同研究を先導・組織できる若手言語研究者の育成

■研究資源共同利用体制の構築

- ・研究成果、言語資料処理・資源化のための方法論研究と技術的開発
- ・言語データ共有、共同利用を可能にするためのアーカイブネットワークの構築

■記述言語学に関わる若手研究者のネットワーク構築

- ・記述言語研究コミュニティ Fieldlingの主催(p.28参照)



研究資源

知の拡大を支える 資料と情報のベース

AA研は、アジア・アフリカ諸地域の言語・文化等に関する研究資料・情報を研究資源として利用可能な形に編集し、それを国際的に共有するための研究資源拠点としての活動を推進しています。

■情報資源利用研究センター (IRC)は、言語のテキストや音声、写真・絵画・地図・ポスターなどの画像、フィールド調査記録といった言語・文化に関する情報資源を蓄積・加工して、データベース・アーカイブ・電子辞書・言語地図などの形で公開し共同利用に供しています。▶p.22

■情報資源戦略研究ユニットが担当するアジア書字コーパス拠点(GICAS)は、アジア各地の文字資料を電子化してコーパスを構築し、それをもとに「文字情報学」という新たな学問領域を体系化することで文字情報処理に学問的基盤を与え、アジアの文字に関する文字情報学の国際レファレンス・センターとしての役割を果たしています。▶p.23

■音声学実験室は言語音の録音・分析設備に加え、スタッフのフィールド調査を通じて収集された言語音など録音資料のライブラリを有しています。▶p.24

■現地の図書・雑誌・文書・地図などの文献およびマイクロフィルム、アジア・アフリカ研究の分野における先覚者の個人文庫など、貴重な資料を収集した文献資料コレクションがあります。▶p.24



情報資源利用研究センター (IRC)



1. 設置目的

情報資源利用研究センター (Information Resources Center/ILCAA, 略称IRC-ILCAA, 以下IRC)は、アジア・アフリカの言語文化に関する情報資源の蓄積・加工・公開と、それを活用した共同研究手法の開発、国際学術交流の推進を目的として、1997(平成9)年度に設置されました。2009(平成21)年度からは、研究資源構築、ならびにその共同利用に向けた国内外の研究者との連携体制を更に強化することを重点目標として、IRCの改組に踏み出しました。

2. 沿革

本研究所は、従来から、アジア・アフリカの諸言語のデータをデジタル化し、それぞれの言語の音韻論的・統語論的・語彙論的分析をおこなうとともに、歴史的・民族学的研究等、多目的な用途に供するデータベースの充実を図ってきました。これらのデータベースは、本研究所の最も重要な事業のひとつである、アジア・アフリカ諸言語の辞典・諸民族の歴史・文化の事典編纂のための基礎資料を提供するとともに、全国の研究者コミュニティの共同利用に供されてきました。IRCは、このような従来の研究所の活動を基礎に、下記の点で、理論・技術の整備・洗練を行うことを目標としました。

(1) アジア・アフリカの言語文化に関するコンテンツ公開

本研究所が所蔵・収集しているアジア・アフリカの言語データ、言語文化に関する多様な資料(パンフレット、ポスター、フィルム、8ミリ、ビデオ、録音テープ等)の電子化と公開。

(2) 国際的共同研究の展開

アジア・アフリカの言語文化に関するデータベースや電子辞書、映像資料などの構築・作成、公開と共有のプロセスの国際的な次元での展開、それに対する研究支援、国際的共同研究の効率化と内容の充実。

(3) コンテンツ蓄積・交換に関する基礎理論の整備母体

通時的文字論を考慮した文字コード(符号化文字集合)論、多言語処理論、多表記系(スクリプト)の照合(collation)・整形・組版基礎理論等の分野の理論化。多表記系(スクリプト)混在での入力方式、整形・組版結果の交換プロトコル等における仕様の洗練。画像・動画・音声抽象検索などのマルチメディア系での入力方式とインタフェースの整備。

IRCは、発足以来、上記の活動方針に基づいて、多様な活動を展開してきました。たとえば、電子辞書(日本語-英語-マラヤーラム語辞書、カンナダ語-英語-日本語辞書など)、言語文化の多面的統合データベース(北東ユーラシア、チベットなど)、画像資料のデータベース(アジア・アフリカ映像アーカイブ、オス

マン古地図など)などが構築され、それらの多くが公開されています。また、IRCでは、研究活動の成果を発信するために、インターネット上に「デジタル言語文化館」を開館しました。「デジタル言語文化館」は、コンテンツのみならず、その加工・呈示技術やそれらの技術の背景となる理論自体もコンテンツとして含む点を特徴とすることで、従前のデジタルライブラリ(電子図書館)の発想を乗り越えることを目指しました。

3. IRCの更なる発展に向けて

IRCは1997(平成9)年4月の設置以来、着実なデータの蓄積・加工・公開を継続し、言語地図や電子辞書などIRCの「顔」ともいえるべき成果を造り上げてきました。2009年からは、これらの成果を踏まえて、中期計画に記載された「研究資源構築ならびにその共同利用に向けて国内外の研究者との連携体制を強化する」という方針に基づき、研究の更なる充実を目指して、改組に踏み出しました。現在、以下の方向性にそった研究活動内容を指針として掲げ、具体的な活動を検討、実行しつつあります。

- (1) 研究資源構築と体系化: IRC設立以来今日までに蓄積されたノウハウを総括し、その応用、改良、普及を図ります。
- (2) ウェブサイトの充実を図り、研究資源発信体制を強化します。
- (3) 研究者コミュニティにおける情報化された研究資源の共有とそれに基づいた研究手法の探究を進めます。
- (4) 所内の研究ユニットと連携しながら共同研究を進めると同時に、IRCを主体とした連携性・国際性のある研究テーマを外資金の導入も視野に入れて追求していきます。
- (5) IRCにおいて構築した研究手法を用いて、所外の主に若手研究者とともに、開かれた共同研究を推進し、研究手法の普及、発展を目指します。

4. 今年度の主な研究事業

第一にはこれまでの研究事業を継承し、センター員や所員のみならず、所外の研究者の参加も得て、IRC経費によるデータベース構築、アジア・アフリカの言語文化に関する一次資料の研究資源化のためのプロジェクトを企画し、実施していきます。第二には、所内・学内の研究単位、例えば、研究ユニットやグローバルCOE「コーパスに基づく言語学教育研究拠点」、あるいは、大型の研究経費、例えば、文部科学省特別教育研究経費によるプロジェクト「言語ダイナミクス科学研究プロジェクト」などとの連携研究活動を強化します。そして第三には、センター員を中心としたプロジェクト「地名にみる歴史の痕跡」を継続、発展させます。第四には、開かれた共同研究を展開するために、昨年度から試行的に開始した「IRCワークショップ」の活動を軌道に乗せま



アジア書字コーパス拠点 (GICAS)



GICAS「アジア書字コーパス拠点」は、文部科学省のCOE拠点形成・特別推進研究(COE)「アジア書字コーパスに基づく文字情報学の創成」(Grammatological Informatics based on the Corpora of Asian Scripts)によって2001(平成13)～2005(平成17)年度の5年間にわたり補助金を得て形成されてきた「COE研究拠点」の1つです。

GICAS拠点が体系化を目指す「文字情報学」は、アジアにおいてとりわけ豊かな「文字」を情報通信の基盤メディアとして捉え直し、ここに国際的な文字情報通信で求められる学問的基礎を与えることを目的とする新しい学問領域です。

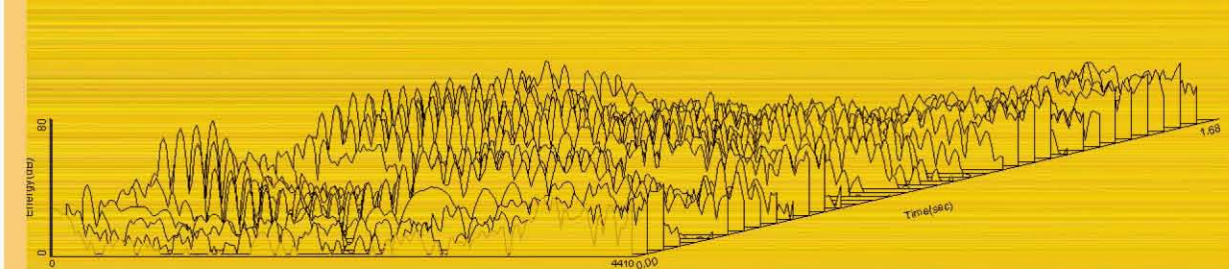
GICASは、研究所の従来の研究活動をいっそう拡充して、統計的解析を行うに十分な規模の資料体(コーパス)としてアジア各地に蓄積される書字文化資料の「アジア書字コーパス」を構築してきました。各地に伝存する碑文・石経、諸宗教聖典の宮廷写本など、本文・字体の双方に規範を示すために作成された聖典書字資料はアジア各地に残存しますが、この電子化を中心とした「アジア書字コーパス」(Corpora of Asian Scripts)は、そこに投影されるアジアでの文字学問研究の伝統と文字使用文化の歴史の電子的な表現であり、「アジア書字コーパス」を現代の情報処理技術で実装することで、検証可能性を持つ新たな学問領域「文字情報学」の創成と体系化の基盤とすることができます。

「アジア書字コーパス」の実装は、文字情報処理に確固たる学問的基盤を与えることを意味し、これによって「アジア書字コーパス」に文字情報学の国際的レファレンス・センターとしての認知を得て、アジアの文化に根差した文字学研究・文字情報処理においても、我が国が主導的な立場に立つ事を目指すものです。

5年間(平成13年～17年度)の補助金助成が終了したGICASは、2006(平成18)年度より、名実ともにCOE拠点としてひとり立ちしました。研究面では、従来のプロジェクトを継承発展させるとともに、文字情報学の新しいパラダイムの展開に取り組んでいます。具体的には、科学研究費や委託研究費など新たに獲得した各種の競争的研究費による研究プロジェクトを核に研究を推進しています。

2006(平成18)年度よりGICASの本研究所内の組織的運営は、情報資源戦略研究ユニットが担当しています。

GICASは独自のインターネット・ドメインを取得済です。GICASのホームページは<http://www.gicas.jp/>で、そこにこれまでの研究成果などが公開されているので、是非ご覧ください。



音声学実験室

本研究所の音声学実験室は、言語音の基礎研究に関する分析や実験を行うために必要不可欠な設備を備えています。コンピュータスピーチラボ(CSL4500)は、多機能な発話信号分析機器です。音声などのアナログ信号を高品質でコンピュータに取り込み、スペクトログラム・フォルマント軌跡・LPC(線形予測符号化)周波数反応・FFT(高速フーリエ変換)パワースペクトル・LTA(長期平均)パワースペクトル・ケプストラム分析・ピッチ曲線分析・エネルギー曲線分析など、さまざまなタイプの分析を行うことができます。また、波形編集・チャンネル編集・時間編集・振幅編集などの基本的な編集機能や、記録・再生の機能も当然ながら有しています。さらに、リアルタイム・スペクトログラフ分析とリアルタイム・ピッチ分析を行うためのCSL専用ソフトウェアも利用可能です。この機器は、言語学的観点から見た発話音の様々な側面の分析を行うのに適切なものです。

音声学実験室に備えられた音声・言語ライブラリには、所員をはじめとする研究者がフィールド調査を通じて収集してきた言語音・民話・民族音楽など貴重な録音資料が保管されています。これらフィールド調査の成果である録音ディスク・テープの一部および世界諸言語の録音ディスク・テープは、借り出すことができます。実験室にある分析機器・録音機器・メディア変換用機器などのハードウェアとソフトウェアには使用説明書が備えられ、利用者の便を図っています。

音声学実験室内には、防音スタジオが用意されています。スタジオに備えつけられた最新型のソリッドステートデジタル録音機を使用して、話者の発話サンプルの高品位な録音を行い、実験室の機器を用いてそれを分析することができます。

文献資料コレクション

本研究所は、1964(昭和39)年の創設以来、全国共同利用機能をもつ研究所として、アジア・アフリカ諸地域の言語・文化の研究のための重要資料を収集してきました。現在、資料総数は、図書11万冊、雑誌約1,220タイトル、マイクロフィルム1万余リール、マイクロフィッシュ3千余に達し、ほかに古文書、地図、写真、またビデオやCD-ROMなどの形の資料も所蔵しています。本研究所のみがもつ貴重な資料も少なくありません。

たとえば、カンボジア語版南伝大蔵経は、カンボジアの戦乱により現地では散逸しましたが、本研究所所蔵本をもとに複製版がつくられ、カンボジアの文化教育機関、寺院に寄贈されて、彼の地の文化復興に貢献しました。また、浅井恵倫旧蔵資料(台湾先住民関係の土地契約文書、動画、写真、語彙集、用例集、フィールドノート等)は、ウェブ上で公開されています。

このほかにも、オスマン語劇場ポスター、ナポレオン「エジプト誌」(第2版)、19世紀「カイロ石版画集」コレクション、19世紀末からのイランの主要新聞65種、19世紀末に創刊されたベンガル語文芸雑誌のバックナンバー、中国清代の製糖法を伝える画集、清代台湾民俗図、清代モンゴル語仏典、ロシア帝国で出版されたモンゴル語聖書、満洲国駐タイ公使館文書、日本の植民地官僚で京城帝国大学総長も務めた篠田治策の文書など、貴重な資料が所蔵されています。三浦周行旧蔵品を含む朝鮮王朝古文書類コレクションや、清代公文書コレクションは、近年入手したものです。

アジア・アフリカ研究における先覚者の個人文庫としては、山

本謙吾(満洲語研究)、小林高四郎(モンゴル史研究)、前嶋信次(イスラーム研究)、王育徳(台湾語・文化研究)諸氏の蔵書があります。

蔵書のうち、一般図書、個人文庫類は附属図書館1階(書庫2層)のAA研コーナーに配架され、貴重書、辞書・辞典・目録等の参考図書、大型本、叢書、マイクロフィルム類、雑誌は研究所棟1階の文献資料室に設置されています。AA研所蔵資料の利用については、

<http://www.tufs.ac.jp/common/library/etc/AAshiryoshitsu.html> をご参照ください。



書架を増設した文献資料室



研究者養成

知識と経験の 終わりなきリレーのために

アジア・アフリカ地域に生きる人々の営みへの理解をさらに深めていくことは、我々が絶えず取り組んで行くべき課題です。次代を担うこの分野の研究者を養成するために、AA研は次のような活動に取り組んでいます。

■アジア・アフリカ地域の研究を志す学習者のために、日本人の専門家と母語話者とが協力して、独自の教材を用いた短期集中的な言語研修を毎年行っています。▶p.26

■様々な大型研究・教育プロジェクトの内部で、研究者養成のプログラムを実施しています。

- グローバルCOE拠点形成プログラム「コーパスに基づく言語学教育研究拠点」▶p.28
- Fieldling(言語ダイナミクス科学研究プロジェクトの活動の一部である、記述言語学の若手研究者のコミュニティ)▶p.28
- 中東・イスラーム研究セミナー、中東・イスラーム教育セミナー▶p.27
- ペイルート若手研究者研究報告会▶p.27

■大学院教育への参加や、ジュニア・フェロー、日本学術振興会特別研究員の受け入れを行っています。▶p.43



成果公開

新たな知見の波を 社会へ 世界へ

アジア・アフリカ地域の人文科学研究の成果に対する一般社会からのニーズに応えるために、AA研は次のような成果公開の活動を行っています。

- 定期刊行物・叢書・基礎語彙集・言語研修テキストなど、各種出版物の刊行 ▶ p.30
- 研究成果の一端を、わかりやすい形で見せる企画展の開催 ▶ p.29
- ウェブサイトを通じた情報発信 ▶ p.29
- 公開シンポジウム・講演会 ▶ p.20



フィールドサイエンス研究企画センター(FSC) 中東イスラーム研究教育プロジェクト(MEIS) 中東・イスラーム研究セミナー、中東・イスラーム教育セミナー

本セミナーは、2005(平成17)年度から始まった中東イスラーム研究教育プロジェクトの一環として、AA研が推進している研修事業です。中東もしくはイスラーム世界に知的・学問的関心を持ち、調査・研究を進めている大学院生や若手研究者を対象に、この研究領域に関する最新の学問的情報を提供して知識の幅を広げ、問題意識にあふれた研究発表を通して研究会などにおけるプレゼンテーションやディスカッションの能力を高めることを目的としています。

「教育セミナー」は、大学院生を対象に、AA研スタッフと招へい講師による講義、受講生のうち希望者による研究発表から構成されています。中東やイスラームについて専攻する大学院生はもとより、専門分野の基礎はできているが中東やイスラームを専攻としない院生も受け入れ、基礎的な知識や研究手法の情報提供、受講者の間の討論を通じた交流の場を作っています。

「研究セミナー」は、それよりも高度なレベルの研究者、すな

わち大学院博士課程後期(博士課程)および博士論文の準備をしている方々を対象にしています。講義は行わず、長時間の研究発表と徹底した討論の機会を提供します。博士論文構想のヒントを得たり、異なる研究分野・地域の研究者との意見交換から知識を拡充したりすることが期待されます。年1回の「教育セミナー」とは異なり、少人数で行われる「研究セミナー」は、年に2回開催されます。

なお本事業は、2006(平成18)年度から、東京外国語大学大学院、および同大学院と単位互換協定を結んでいる大学院に所属している院生には、単位履修申請科目となっています。

本事業のより詳しい説明や受講生のセミナーに対する感想・評価に関しては、下記のWebページをご覧ください。

http://www.aa.tufs.ac.jp/fsc/meis/kyouiku_s.html(教育セミナー)

http://www.aa.tufs.ac.jp/fsc/meis/kenkyu_s.html(研究セミナー)

フィールドサイエンス研究企画センター(FSC) 中東イスラーム研究教育プロジェクト(MEIS) ベイルート若手研究者研究報告会

中東・イスラーム研究セミナー、教育セミナーと同じく、2005(平成17)年度から始まった中東イスラーム研究教育プロジェクトの一環として、AA研が推進している事業です。国籍を問わず、日本において中東に関連する人文・社会科学(地域研究・歴史学・人類学・イスラーム学など)を専攻している若手研究者の最新の研究成果を、レバノンをはじめとする中東の研究者たちに広く知っていただくとともに、専門家同士の密度の濃い議論の場を提供することを目的としています。公募によって選考され、中東現地に派遣される若手研究者は、英語による30分間の研究報告を行い、その後15分間、開催地や近隣の中東諸国あるいは欧米から招聘したコメンテータを含む参加者との間で質疑応答を行います。本報告会は、2006(平成18)年度はイスタンブールのボアジチ大学、2007(平成19)年度はベイルートのクラウン・プラザ・ホテルで開催しましたが、2008(平

成20)年度からはレバノン共和国ベイルートにおける研究拠点「中東研究日本センター」を会場とし、「日本における中東研究の最前線」 Middle Eastern Studies in Japan: the State of the Art というタイトルのもとで開催しています。

なお、これまでに本報告会に参加した若手研究者の報告内容と質疑応答の概要、感想などについては、下記のWebページをご覧ください。

http://www.aa.tufs.ac.jp/fsc/meis/WS_Beirut081124.html
(2008年度)

http://www.aa.tufs.ac.jp/fsc/meis/WS_Beirut071126-27.html (2007年度)

http://www.aa.tufs.ac.jp/fsc/meis/WS_Istanbul061127.html
(2006年度)



グローバル COE 拠点形成プログラム

コーパスに基づく言語学教育研究拠点 (略称 CbLLE)

「コーパスに基づく言語学教育研究拠点」(Corpus-based Linguistics and Language Education) は、東京外国語大学大学院地域文化研究科とAA研との連携による「グローバル COE」(GCOE)プログラムとして、2007(平成19)年度から5年間の予定で実施されている拠点形成プログラムです。

ここでいう「コーパス」とは、話し言葉や書き言葉をはじめとする言語資料に、発音・文法・方言・文体・機能など、言語分析に必要な情報(タグ)を加えて構造化したデータの集合体を指します。そして、「コーパスに基づく言語学」とは、自然言語処理を中心とするコーパス言語学よりも広い意味での「コーパスデータに基づいた、実証的、経験主義的な言語研究」を意味します。

CbLLEでは、「フィールドからコーパス構築へ、さらに教室での応用へ」をスローガンとして、フィールドでの一次資料収集、デジタル化、コーパス構築、コーパスの言語学的な分析から言語教育への応用を一貫したプロセスと捉え、そのための研究、教育、開発環境の充実を目指します。

上記の目標を達成するために、次の3つの班を組織します。

●フィールド言語学班：記述研究が十分進んでいない言語を記述し、コーパスの構造について指針を与えるような研究を行います。

●コーパス言語学班：一定の記述はなされているが、言語資料のデジタル化が未発達な言語を対象に、コーパスの構築と、機械可読辞書(MRD)など言語資料を扱うのに不可欠なツールの開発に資する研究を行います。

●言語情報学班：資料のデジタル化が十分進んだ言語を対象に、分析ツールの開発、機能別コーパスの構築、コーパスを利用した言語教育法や教材の開発といった応用研究を行います。

研究の成果をもとに、フィールド言語学、コーパス言語学、言語情報学の三分野の手法をバランス良く習得した人材の育成を行うことも、CbLLEの主要な目的の1つです。そのために、次のような教育プログラムを実施しています。

●主として博士後期課程の大学院生を対象に自主的研究プロジェクトを公募し、国内外での言語調査や外国語教育の現場でコーパスの構築とその利用の実験経験を積ませます。ここから得られた研究成果と分析上のノウハウもまたCbLLEという教育研究拠点の「資産」となります。

●3つの分野の第一線の研究者と大学院生が共同して講演・研究発表を行います。

●若手研究者による研究成果を、国内外の学会で発表させるなどの支援を行います。

言語ダイナミクス科学研究プロジェクト(LingDy)

Fieldling:記述言語研究コミュニティ

Fieldlingは、記述言語学に携わる若手フィールドワーカーが主体となって所属研究室の枠を超えた協力体制を構築するための共同研究プロジェクトです。2005(平成17)年にAA研を基地として活動を開始して以降、メンバー自身の企画・提案により、さまざまな研究会やワークショップを行なっています。2008(平成20)年度からは、言語ダイナミクス科学研究プロジェクト(p.19参照)の枠内に運営基盤を置き、これまで以上に活発な活動を予定しています。

主な活動には、(1)各メンバーが研究対象の言語データを持ち寄り、具体的なトピックに絞って議論する研究会、(2)分析のスキルアップを目的としたワークショップ、(3)現地調査で得た資料や研究成果の刊行、(4)フィールドワーカー同士が情報・知識を交換できる記述言語研究コミュニティ・ウェブサイトの構築と運営、(5)言語の記述的研究について広く理解して

もらうための一般向けウェブサイトの運営、などがあります。

■『文法を描くーフィールドワークに基づく諸言語の文法スケッチー』：実際に収集したデータをもとに、各メンバーが専門としている言語の姿を、言語の概略、音声・音韻、形態論、文の構造、テキスト資料という項目に分けて、1言語につき30ページ程度でまとめました。現在第2集まで刊行しています。

■Documentary Linguistics Workshop：2008(平成20)年2月および2009(平成21)年2月にロンドン大学SOASより2名の講師を迎え、ワークショップを開催しました。このワークショップは今後も定期的に開催し、若手フィールドワーカーが研究に必要な学問的・技術的知識を身につける場としていきます。

Fieldling Blog <http://fieldling.aacore.jp/>



企画展

本研究所が収集したアジア・アフリカの言語と文化に関する貴重な資料を、広く一般に公開するために企画展を実施しています。

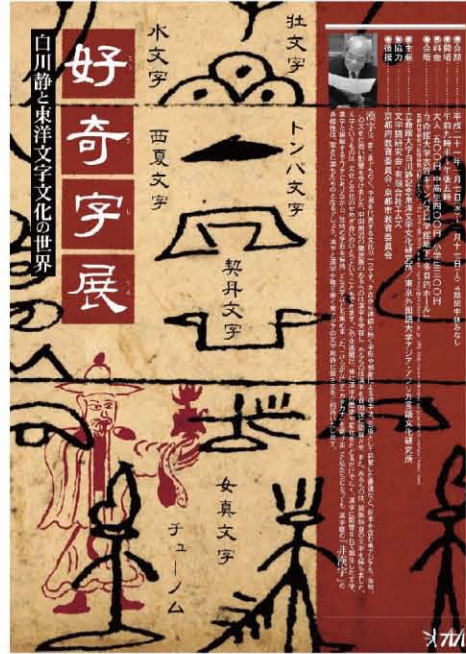
2008(平成20)年度は、2006、2007年度に好評を博した「好奇字展」(<http://www.aa.tufs.ac.jp/kanji/>)を会場を変えて開催しました。

□「好奇字展(こうきじてん)」

—白川静と東洋文字文化の世界—

(2009/1/7 ~ 17 立命館大学衣笠キャンパス(京都市北区))

本企画展は、AA研と立命館大学白川静記念東洋文字文化研究所の共催による特別企画展です。漢字を中心とした東アジアの文字文化とそれらの研究活動を、貴重な所蔵書籍、文字と文化を解説したパネル、ユニークな装飾品を通して、広く紹介することを目的として開催しました。2007/2/13~3/23、2007/4/9~4/20にAA研で開催された「好奇字展—漢字と東アジアの文字周遊」の各種展示品に加え、漢字学者故白川静立命館大学名誉教授の業績・経歴の説明パネル、一般向けの漢字学習のコーナーなどで構成しました。



ウェブサイト



本研究所のウェブサイト(<http://www.aa.tufs.ac.jp/>)では、共同研究を柱とした研究活動の詳細、所員が中心となって推進している大規模なプロジェクトの情報、研究会の案内・記録、研究所発行物の一覧など、最新の情報を提供しています。さらに、様々なデータベースや辞書、コーパスなど、オンラインで使える研究資料も多数公開しています。

また、研究成果の社会還元の一環として、一般向けコンテンツの制作にも積極的に取り組んでいます。特にここ数年折に触れて開催している企画展のウェブサイトは好評を博しています。

ウェブサイトは現在改装中で、近くりニューアルする予定です。



出版物

本研究所では、言語研修、辞典編纂事業、個人研究、および共同研究プロジェクトを通じたさまざまな研究成果を、数多く出版して公開しています。出版物の一覧は、本研究所ホームページの中の「AA研の出版物」欄もしくは、2006年度出版分までは「出版物目録2007」でご覧になることができます。一部の

出版物については、同ホームページでpdfでご覧になることもできます。

お問い合わせは、出版事務担当(publ@aa.tufs.ac.jp)までお願いいたします。

■逐次刊行物

□学術雑誌

『アジア・アフリカ言語文化研究』(Journal of Asian and African Studies)を年に2回発行しています。所外の研究者を含む編集委員会によって運営され、毎号、査読を経た水準の高い言語学・歴史学・文化人類学に関する論文が掲載されています。海外からの投稿も多数あり、国内外から高い評価を得ています。75～76号では、7つの国と地域から31名(うち、海外13名)の投稿がありました。(掲載論文は右のとおり)

62号からは、本研究所ウェブサイトにおいてpdfで閲覧できます。また、東京外国語大学附属図書館「東京外国語大学学術成果コレクション」(<http://repository.tufs.ac.jp/doc/>)において、閲覧、ダウンロードできる論文もあります。

■2008年度刊行

□75号

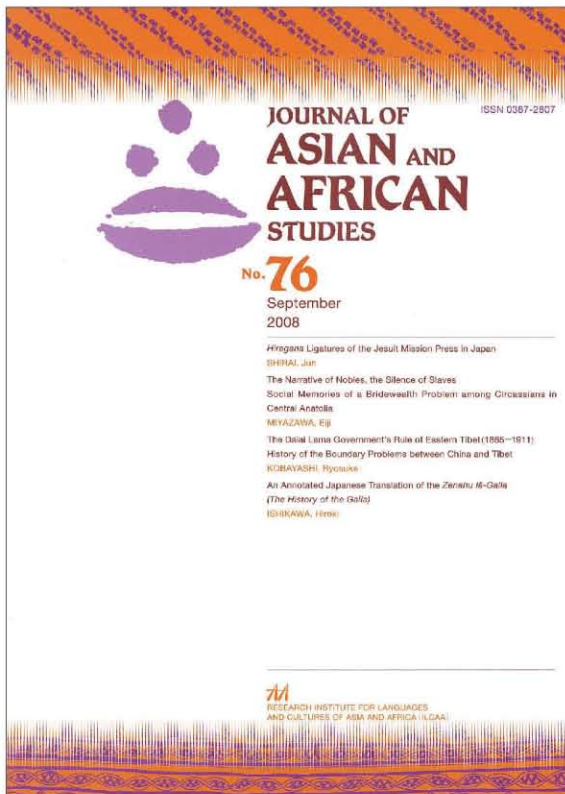
論文

- ・栗山保之「13世紀のインド洋交易港アデン：取扱品目の分析から」
- ・大川真由子「奴隷言説の現在：ザンジバルにおける奴隷制とアフリカ系オマーン人の歴史認識」
- ・椎野若菜「日本におけるアフリカ研究の始まりとその展開：国際学術研究調査関係研究者データベースを使って」

□76号

論文

- ・白井純「キリシタン版の連綿活字について」
- ・宮澤米司「貴族の物語と奴隷の沈黙：中央アナトリアのチェルケス人における婚資問題の社会的記憶」
- ・小林亮介「ダライラマ政権の東チベット支配(1865-1911)：中蔵境界問題形成の一側面」
- ・石川博樹「『ガッラの歴史』訳注」



■各種出版物

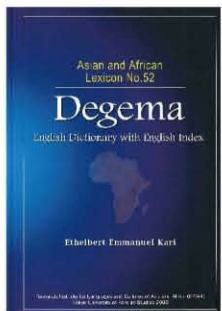
研究所では、以下の様々な研究活動の成果を出版しています。2008(平成20)年度には、p.49のとおり出版しました。



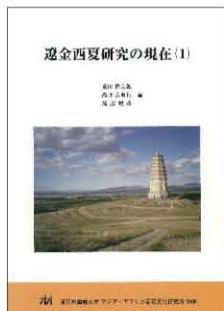
□アジア・アフリカ言語文化叢書
 本研究所を代表する知的成果を誇る出版物です。所内外の研究者による査読を経て、年に1-2点ずつ出版されています。



□言語研修テキスト
 本研究所が毎年開催する言語研修で使用したテキストです。将来のよりよい教材作成のための材料としても生かされます。



□アジア・アフリカ基礎語彙集
 アジア・アフリカの様々な地域で実施された言語調査を元に作成された語彙集です。



□共同研究成果出版物
 本研究所では、共同研究プロジェクトや中東イスラーム研究教育プロジェクト、所員が外部資金を獲得して行っている研究などの成果を出版しています。

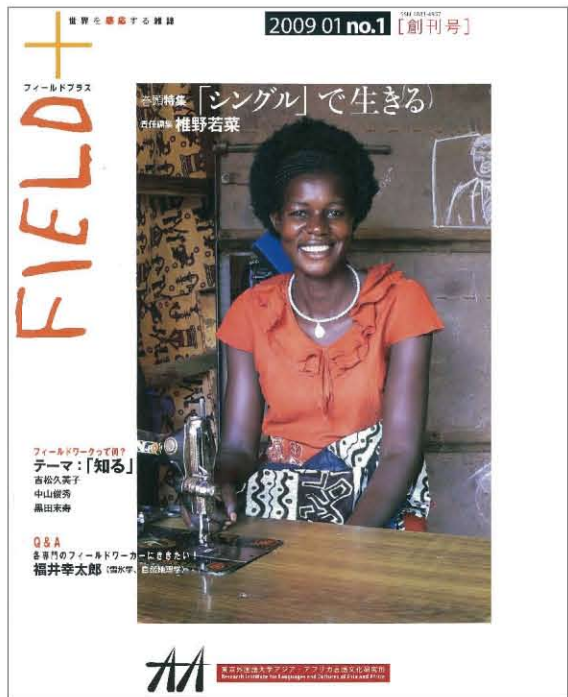
■Field+(フィールドプラス)

AA研では、2007年に廃刊したニュースレター『アジア・アフリカ言語文化研究所通信』に代わって、研究所の活動を報告する新たな媒体として、2009年1月に『Field+(フィールドプラス)』を創刊しました。

『Field+』は、言語学・歴史学・民族学をそれぞれ専門とするAA研の所員やプロジェクトとともに運営する共同研究員をはじめ、人文科学に留まらない多くの分野で活躍する新しい発想をもった研究者を執筆陣に迎え、世界のあらゆる場所をフィールド(調査地)として出かけていく研究者たちの新しい取り組みや、その過程で得られた経験を、さまざまな角度から紹介します。

自分がおもむいた場で、見る、聞く、話す、感じるといった五感を駆使したフィールドワークから得られる経験は、実は私たちの日々の暮らしの中にも見いだすことができるもので、そうした知的刺激を読者に届けたいという願いが『フィールドプラス』というタイトルに込められています。

『Field+』は年2回(1月・7月)刊行し、高校生以上の若い世代をふくむ多くの読者を対象として、豊富なカラー写真や図版を使いながら、フィールド研究の面白さを伝えていきます。





研究スタッフ (2009年5月1日現在)

(専門分野、ここ数年の研究対象・研究テーマ、ウェブサイト)

教授



飯塚 正人 *Iizuka, Masato*

イスラーム学・中東地域研究
9.11後のイスラーム世界におけるイスラームフォビア意識の浸透に関する研究
近現代イスラーム思想の研究
<http://www.aa.tufs.ac.jp/~masato/>



栗原 浩英 *Kurihara, Hirohide*

ベトナム現代史
ベトナム・中国関係の歴史的変遷(1950年代～現在)
中ソ対立とベトナム
<http://www.aa.tufs.ac.jp/~hkuri/camp/>



クリスチャン・ダニエルス *Daniels, Christian* 漢名: 唐立

中国西南部・タイ文化圏の歴史
タイ文化圏における山地民の歴史的研究
雲南におけるタイ文字文献保存



黒木 英充 *Kuroki, Hidemitsu*

中東研究、東アラブ近代史
19世紀シリアの都市アレppoを対象としたムスリム・非ムスリム間の社会関係の変容
オスマン帝国の通訳を素材とした人間移動と越境の実態
レバノン人社会の複合性とグローバルな拡散



芝野 耕司 *Shibano, Kohji*

マルチメディアデータベース、多言語情報処理、CALL
マルチメディアデータベース言語設計、日本語組版
コンピュータ支援による言語教育環境及び
e-learning環境の研究



新谷 忠彦 *Shintani, Tadahiko L.A.*

言語音変化の類型的研究
タイ文化圏の総合的研究
野鶏の家畜化に関する研究
オセアニア諸語の研究

教授

高島 淳 *Takashima, Jun*

宗教学・宗教史学、ヒンドゥー教、言語情報処理
シヴァ教の思想と儀礼の研究
東南アジアにおけるヒンドゥー教の展開
マルセル・モース研究

豊島 正之 *Toyoshima, Masayuki*

中世日本語文献学
特にキリシタン語学、「宣教に伴う言語学」
<http://www.joao-roiz.jp/>

中谷 英明 *Nakatani, Hideaki*

インド初期仏教文献の哲学的・言語学的解明
中期インド語・インド古典韻律の解明
「総合人間学の構築」プロジェクトの遂行
<http://www.classics.jp/GSH/> ; <http://www.classics.jp/RCS/>

永原 陽子 *Nagahara, Yoko*

南部アフリカの歴史
植民地期ナミビア史および南部アフリカ地域史の研究
脱植民地化の双方向的歴史過程における「植民地責任」の研究

中見立夫 *Nakami, Tatsuo*

東アジア・内陸アジア国際関係史
ロシア帝国と「東北アジア」の成立
1910年代の東アジア国際関係
東アジア・内陸アジアの歴史資料

稗田 乃 *Hieda, Osamu*

アフリカ言語学
ウガンダのナイル諸語の調査と記述
ナイル諸語形態統語論の研究(科学研究費補助金)

研究スタッフ (2009年5月1日現在)

(専門分野、ここ数年の研究対象・研究テーマ、ウェブサイト)

教授



深澤 秀夫 *Fukazawa, Hideo*

マダガスカルを中心とするインド洋海域世界の社会人類学的研究
マダガスカルにおける会話と相互行為についての実地調査
O, マノーニにおける<マダガスカル>の表象についての研究
<http://www.aa.tufs.ac.jp/~nfuka/>



ペーリ・バースカララオ *Bhaskarao, Peri*

南アジアの諸言語、音声学
南インド、ニルギル地域の諸言語研究
<http://www.aa.tufs.ac.jp/~bhaskar/>



町田 和彦 *Machida, Kazuhiko*

南アジアの言語学
インド系文字の構造と歴史(GICAS)
ヒンディー語電子辞書(GICAS)
<http://www.aa.tufs.ac.jp/~kmach/>



三尾 裕子 *Mio, Yuko*

東アジアの人類学
台湾における植民地主義に関する歴史人類学的研究
中国系移民の土着化に関する人類学的研究



峰岸 真琴 *Minegishi, Makoto*

インドのオーストロアジア語族の諸言語
東南アジアのタイ語などの研究
コーパス言語学および言語類型論



宮崎 恒二 *Miyazaki, Koji*

文化人類学・東南アジア地域研究
研究テーマ: ジャワ文化、国際移動
<http://www.aa.tufs.ac.jp/~kmiya/profile-sjis.htm>

准教授

荒川慎太郎 *Arakawa, Shintaro*

西夏語文献の言語学的研究、日本所蔵西夏語文献の研究
 西夏時代の河西地域における歴史・言語・文化の諸相に関する研究(科学研究費補助金)
 遼・金・西夏に関する総合的研究(AA研共同研究プロジェクト)
<http://www.aa.tufs.ac.jp/~arakawa/index.html>

太田 信宏 *Ota, Nobuhiro*

南アジアの歴史
 近世南アジアにおける王権の研究
 南インド史上における諸社会集団・組織の研究
 カンナダ語文学の研究

小田 淳一 *Oda, Jun'ichi*

計量文学
 テクストの計量的修辞学
<http://www.aa.tufs.ac.jp/~odaj/>

河合 香史 *Kawai, Kaori*

人類学、東アフリカ牧畜社会研究
 東アフリカ牧畜民の遊動再考
 人類社会の進化史的基盤研究:「制度」(AA研共同研究プロジェクト)

呉人 徳司 *Kurebito, Tokusu*

チュクチ語、モンゴル諸語、言語類型論
 『チュクチ語の分類辞典』の編集
 消滅の危機に瀕した北東ユーラシア諸言語に関するより効率的な調査・記述方法の研究
<http://www.aa.tufs.ac.jp/~tugusk/>
<http://www.ling-atlas.jp/>

近藤 信彰 *Kondo, Nobuaki*

イラン近代史
 法廷文書・ワクフ文書に基づいたテヘランの都市社会史の研究
 法的勅告と法廷制度に関する研究
 ペルシア語文化圏の形成・変容に関する研究

研究スタッフ (2009年5月1日現在)

(専門分野、ここ数年の研究対象・研究テーマ、ウェブサイト)

准教授



澤田 英夫 *Sawada, Hideo*

言語学、文字研究

ミャンマー連邦カチン州で話されるロンウォー語・ラチッ語の記述研究
東南アジアのインド系諸文字で書かれた碑文の画像データベースの構築
<http://www.aa.tufs.ac.jp/~sawadah/index.html>



塩原 朝子 *Shiohara, Asako*

言語学

インドネシア諸語(バリ語、スンバワ語、クイ語(アロール)など)の現地調査に基づく記述研究
情報構造と文法形式の関係についての類型論的研究
<http://www.aa.tufs.ac.jp/~asako/profile-sjis.htm>



陶安あんど *Sueyasu/Hafner, Amd Helmut*

中国法制史・法社会学

睡虎地秦簡、里耶秦簡、張家山漢簡などの出土文字資料を用いた
秦漢の刑罰体系および行政法の研究



高知尾 仁 *Takachio, Hitoshi*

文化人類学

表象論、政治神学、人類学的諸観念の歴史



高松 洋一 *Takamatsu, Yoichi*

オスマン朝史、古文書学、アーカイブズ学

オスマン朝の官僚機構における文書類型とアーカイブズ管理



床呂 郁哉 *Tokoro, Ikuya*

人類学

東南アジア研究

<http://www.aa.tufs.ac.jp/fsc/isea/> (東南アジアのイスラーム・ウェブサイト)

准教授



中山 俊秀 *Nakayama, Toshihide*

言語運用を基盤とした文法形成・変化のメカニズムに関する研究
 言語の構造的多様性の質と幅に関する研究
 ヌートカ語(北米北西海岸)の文法の記述とドキュメンテーション研究
<http://nakayama.aacore.jp/>



西井 凉子 *Nishii, Ryoko*

東南アジア大陸部の人類学
 社会空間と時間の人類学的研究
 東南アジアにおけるイスラーム
<http://www.aa.tufs.ac.jp/~rnishii/>



星 泉 *Hoshi, Izumi*

言語学、チベット語
 チベット語の記述的研究、文法化現象の実証的研究
<http://star.aacore.jp/>



真島 一郎 *Majima, Ichiro*

西アフリカの人類学
 マルセル・モース研究
 中間集団論
<http://www.aa.tufs.ac.jp/~imajima/>



渡辺 己 *Watanabe, Honoré*

セイリッシュ語
 スライアモン・セイリッシュ語の記述的研究
 言語類型的複統合性

研究スタッフ (2009年5月1日現在)

(専門分野、ここ数年の研究対象・研究テーマ、ウェブサイト)

助 教



石川 博樹 *Ishikawa, Hiroki*

歴史学、東アフリカの歴史
北部エチオピアのキリスト教王国史の研究
アフリカにおけるイエズス会による布教活動の研究
ハム仮説の研究



伊藤智ゆき *Ito, Chiyuki*

音韻論
歴史言語学
借用語研究
朝鮮語 (中期朝鮮語、延辺朝鮮語)
<http://www.krling.com/>



椎野 若菜 *Shiino, Wakana*

社会人類学、東アフリカ民族誌学
ケニア・ルオ社会、ウガンダ・ルオー系社会
「シングル」の人類学、居住集団・形態の変化、性研究、フィールドワーク論
<http://wakana-luo.aacore.jp/>

非常勤研究員／特任研究員



小田 昌教 *Oda, Masanori* 特任研究員 2009.4.1～2012.3.31

文化人類学
現代美術
メディア・アクティヴィズム研究
<http://illcommonz.exblog.jp/>



亀井 伸孝 *Kamei, Nobutaka* 2007.9.1～2010.8.31

文化人類学、アフリカ地域研究
アフリカのろう者コミュニティおよび手話言語の現地調査
「フランス語圏アフリカ手話」DVD手話辞典の編集
<http://kamei.aacore.jp/>

非常勤研究員／特任研究員



齋藤 剛 *Saito, Tsuyoshi* 2008.9.1～2011.8.31

社会人類学、モロッコ研究
モロッコにおけるアマズイーグ運動の成立と展開に関する人類学的研究
民衆イスラーム研究



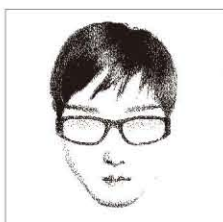
下地 理則 *Shimoji, Michinori* 特任研究員(言語ダイナミクス科学研究プロジェクト) 2009.4.1～2012.3.31

記述言語学、特に琉球語の記述研究
宮古伊良部島方言のリファレンスグラマー作成(博士論文、オーストラリア国立大学)
言語運用と言語構造の研究、複文構造と談話構造の研究
<http://www.geocities.jp/skippingbird76/index.Japanese.html>



長崎 郁 *Nagasaki, Iku* 特任研究員(言語ダイナミクス科学研究プロジェクト) 2009.4.1～2012.3.31

言語学、ユカギール語
コリマ・ユカギール語の記述研究
少数言語のドキュメンテーションにかかわる研究



永山ゆかり *Nagayama, Yukari* 2007.9.1～2010.8.31

言語学
アリュートル語の記述研究



松原 康介 *Matsubara, Kosuke* (中東イスラーム研究教育プロジェクト) 2009.4.1～2010.3.31

都市計画学
都市保全計画: 中東・北アフリカ地域の歴史都市の保全再生に関する研究
地域開発計画: 同地域の国際協力を踏まえた持続的発展に関する研究
地中海都市論: 同地域の都市の多様性のあり方に関する基礎研究
<http://web.sfc.keio.ac.jp/~matsub/>



吉村 貴之 *Yoshimura, Takayuki* (中東イスラーム研究教育プロジェクト) 2008.4.1～2010.3.31

アルメニア近現代史
ソヴェト・アルメニアならびにアルメニア共和国と在外コミュニティとの関係
http://www.aa.tufs.ac.jp/fsc/meis/aa-projects_yoshimura.html

研究スタッフ (2009年5月1日現在)

(専門分野、ここ数年の研究対象・研究テーマ、ウェブサイト)

非常勤研究員／特任研究員



渡部 良子 *Watabe, Ryoko* 2006.12.1～2009.11.30

前近代イラン史
書記のための手引書文献に見えるペルシア語書簡術の発展の歴史
13-14世紀モンゴル支配期イランの社会・文化史
モンゴル支配期のペルシア語韻文史

外国人研究員



Di Cosmo, Nicola (ディ・コスモ, ニコラ) 2009.1.1～2009.8.31

中央ユーラシア・東アジア史
清朝初期満洲族社会に関する社会経済史的研究
*プリンストン高等研究所



Heine, Bernd Rüdiger (ハイネ, バート・リュディガー) 2008.9.1～2009.8.31

言語類型論
文化化の観点から通時的变化ならびに言語接触における言語現象の研究
コイサン諸語の記述
*ケルン大学



Kenstowicz, Michael John (ケンストウィッツ, マイケル・ジョン) 2008.9.1～2009.8.31

音韻論
借用語音韻論
トーン・アクセント研究
*マサチューセッツ工科大学



König, Christa (ケーニヒ, クリスタ) 2008.9.1～2009.8.31

アフリカ諸言語の格標示に関する大陸横断的、通時的、共時的の研究
コイサン諸語の記述
*フランクフルト大学

外国人研究員



Vossen, Rainer (フォッセン, ライナー) 2009.3.1～2009.8.31

現地調査に基づくナイル諸語の記述研究

コイサン諸語の記述

*フランクフルト大学

関連資料

[共同研究員]

■言語の構造的多様性と
言語理論—「語」の内部構
造と統語機能を中心に

阿部 優子
稲垣 和也
江畑 冬生
蝦名 大助
風間 伸次郎
加藤 昌彦
加藤 重広
児島 康宏
下地 理則
沈 力
塚本 秀樹
永井 佳代
長崎 郁
永山 ゆかり
山越 康裕
山田 敦士

■ムスリムの生活世界と
その変容—フィールドの
視点から

青柳 かおる
赤堀 雅幸
新井 和広
新井 一寛
石原 美奈子
臼杵 陽
宇野 昌樹
大川 真由子
大坪 玲子
大谷 哲也
大野 旭(楊 海英)
奥野 克己
菊地 滋夫
小杉 泰
小牧 幸代

斎藤 剛
坂井 信三
澤井 充生
澤江 史子
清水 芳見
鷹木 恵子
高田 峰夫
多和田 裕司
東長 靖
外川 昌彦
中田 考
長津 一史
中山 紀子
縄田 浩志
錦田 愛子
子島 進
信田 敏宏
花淵 馨也
堀井 聡江
堀内 正樹
三尾 稔
村上 薫
山岸 智子
吉田 世津子
吉村 貴之
渡部 良子

■マルセル・モース研究
—社会・交換・組合

泉 克典
小杉 麻李亜
佐久間 寛
関 一敏
高村 学人
屋間 賢
溝口 大助
渡辺 公三

■表象に関する

総合的研究
浅井 雅志
荒木 正純
今村 真介
瀧永 信美
藤藤 晃
田中 純男
原 毅彦
山内 志朗

■東アジアの社会変容と
国際環境

赤嶺 守
石井 明
石川 禎浩
井上 治
井村 哲郎
上田 貴子
アイビッド・ウォルフ
江夏 由樹
岡 洋樹
岡本 隆司
笠原 十九司
加藤 直人
川島 真
貴志 俊彦
岸本 美緒
楠木 賢道
イゴリ・サヴェリエフ
佐々木 揚
新免 康
菅原 純
寺山 恭輔
西村 成雄
萩原 守
濱下 武志
原 暉之

平野 聡
広川 佐保
ブレンサイン
細谷 良夫
松川 節
松重 充浩
毛里 和子
森川 哲雄
柳澤 明
吉澤 誠一郎
吉田 豊子

■タイ文化圏における
山地民の歴史的研究

飯島 明子
池田 一人
イン・イン・メイ
樫永 真佐夫
片岡 樹
加藤 高志
清水 享
園江 満
武内 房司
立石 謙次
長谷 千代子
西谷 大
村上 忠良
山田 敦士

■遼・金・西夏に関する
総合的研究

一言語・歴史・宗教一
井黒 忍
臼杵 勲
小野 裕子
佐藤 貴保
佐藤 友則
澤本 光弘

白石 典之
鈴木 宏節
高井 康典行
高橋 学而
武内 康則
武田 和哉
藤原 崇人
松田 善之
松川 節
松下 道信
向本 健
毛利 英介
森部 豊
渡辺 健哉

■ペルシア語文化圏の
歴史と社会

赤坂 恒明
秋葉 淳
阿部 克彦
五十嵐 大介
磯貝 健一
大河原 知樹
大稔 哲也
小野 浩
川口 琢司
川本 正知
後藤 敦子
小牧 昌平
清水 和裕
菅原 睦
菅原 純
中西 竜也
二宮 文子
羽田 亨一
春田 晴郎
深見 奈緒子
藤井 守男

関連資料

前田 弘毅
真下 裕之
間野 英二
守川 知子
森本 一夫
矢島 洋一
山口 昭彦
渡部 良子

■「シングル」と社会 一人類学的研究

石井 美保
上杉 妙子
植村 清加
宇田川 妙子
岡田 浩樹
小田 亮
國弘 暁子
小馬 徹
千田 有紀
高橋 絵里香
田所 聖志
田中 雅一
榎橋 訓
花淵 馨也
馬場 淳
細谷 幸子
森 明子
八木 祐子

■「もの」の人類学的研究 一もの、身体、環境の ダイナミクス

今堀 恵美
岩谷 彩子
印東 道子
内堀 基光
織田 竜也
春日 直樹
金子 守恵
川田 順造
窪田 幸子
黒田 末寿
湖中 真哉
小松 かおり
菅原 和孝
砂川 和範
関本 照夫
田中 雅一
土佐 桂子
清 清
山越 言
山本 真鳥

■総合人間学の構築

池本 幸生
石堂 常世
市川 裕
井原 康夫
ミヒャエル・ヴィツツェル
内堀 基光
大津 透
小川 正廣
柿本 隆介
笠井 清登
桂 紹隆

亀山 郁夫
河井 徳治
黒田 彰
後藤 敏文
新宮 一成
杉下 守弘
杉本 良男
中島 隆博
中田 力
長野 泰彦
納富 信留
日高 敏隆
藤井 正人
寶珠山 健
松井 健
松尾 剛次
丸山 徹
水野 善文
宮崎 泉

■脱植民地化の 双方向的歴史過程におけ る「植民地責任」の研究

浅田 進史
阿部 小涼
網中 昭世
粟屋 利江
飯島 みどり
板垣 竜太
今泉 裕美子
大井 知範
大峰 真理
小山田 紀子
尾立 要子
後藤 春美
小林 元裕
柴田 暖子
清水 正義
鈴木 茂
高林 敏之
旦 祐介
津田 みわ
中野 聡
濱 忠雄
半澤 朝彦
平野 千果子
船田 一郎
前川 眞城
溝辺 泰雄
吉澤 文寿
吉田 信
渡辺 司

■社会空間論の再検討 一時間的視座から

石井 美保
今村 真介
岩谷 彩子
春日 直樹
久保 明教
小池 郁子
古谷 伸子
佐藤 知久
高木 光太郎
高崎 恵

田中 雅一
田邊 繁治
土佐 桂子
名和 克郎
檜垣 立哉
平井 京之介
筋内 匡

■言語接触と系統継承： 大湖地域から南部アフリ カにかけて話されている バンツ語と隣接言語 の記述研究

安部 麻矢
阿部 優子
加賀谷 良平
梶 茂樹
角谷 征昭
神谷 俊郎
河内 一博
クリスタ・ケーニヒ
塩田 勝彦
品川 大輔
高村 美也子
中川 裕
バンド・R・ハイネ
八尾 紗奈子
ライナー・フォッセン
若狭 基道

■アジア・アフリカ地域に おけるグローバル化の 多元性に関する 人類学的研究

新井 和広
岩谷 彩子
奥島 美夏
木村 自
湖中 真哉
小松 かおり
富沢 寿勇
錦田 愛子

■宣教に伴う言語学

岡 美穂子
折井 善果
川口 敦子
岸本 恵実
白井 純
丸山 徹

■朝鮮語歴史言語学のため の共有研究資源構築

李 安九
李 文淑
伊藤 英人
門脇 誠一
岸田 文隆
陳 南澤
須賀井 義教
竹越 孝
趙 義成
辻 星児
中島 仁
南 潤珍
朴 真完

福井 玲
藤本 幸夫
村田 寛

■インドネシア在地位書 研究プロジェクト

青山 亨
風間 純子
菅原 由美
深見 純生

■人類社会の 進化史的基盤研究(2)

足立 薫
伊藤 詞子
内堀 基光
梅崎 昌裕
大村 敬一
春日 直樹
北村 光二
黒田 末寿
蔭 宏偉
杉山 祐子
曾我 亨
田中 雅一
寺嶋 秀明
早木 仁成
船曳 建夫

■チベット=ビルマ系言 語から見た文法現象の再 構築2：文の特徴付けと 下位分類

池田 巧
海老原 志穂
大塚 行誠
岡野 賢二
加藤 昌彦
桐生 和幸
白井 聡子
鈴木 博之
高橋 慶治
西田 文信
林 龍彦
本田 伊早夫

■マレー世界における 地方文化

青山 亨
新井 和広
奥島 美夏
オマール・ファルーク
川島 緑
久志本 裕子
国谷 徹
梶沢 英雄
黒田 景子
小林 寧子
塩谷 もも
篠崎 香織
菅原 由美
坪井 祐司
東長 靖
富田 暁
中田 考
西 芳実

西尾 寛治
服部 美奈
見市 建
水上 浩
光成 歩
山口 裕子
山本 博之

■漢字字体規範史の研究

石塚 晴通
池田 証壽
岡端 裕剛
小池 和夫
小宮山 博史
高田 智和
府川 充男

■語集と文法

梶 茂樹
塩田 勝彦
中島 久
林 範彦
藪 司郎
米田 信子

■多言語状況の比較研究

市之瀬 敦
大原 始子
梶 茂樹
神谷 俊郎
木村 護郎 クリストフ
古閑 恭子
小森 淳子
佐野 直子
塩田 勝彦
品川 大輔
渋谷 謙次郎
砂野 幸穂
白井 聡子
塚原 信行
柘植 洋一
寺尾 智史
名和 克郎
原 聖
原 真由子
藤井 久美子
藤井 毅
フフバートル
前田 達朗
宮崎 久美子
森山 幹弘
安田 敏朗
山下 仁
米田 信子
李 守
若狭 基道
渡邊 日日

[研究者招へい]

□外国人研究員 着任期間が2009.9.1～2010.8.31に含まれる者

氏名	所属機関	受入期間	研究分野
Assunção, Carlos Costa	トラーズ・ウズ・モンテス・イ・アルト・ドゥロ大学文学部(ポルトガル)	2010.1.10～2010.7.10	言語学
Behrend, Heike	ケルン大学アフリカ学研究所(ドイツ)	2010.2.1～2010.8.15	人類学
Dessalles, Jean-Louis	フランス国立高等情報通信学校(フランス)	2009.9.1～2010.2.28	言語学
Domii, Tumurtogoo	モンゴル国科学アカデミー言語学研究所(モンゴル)	2009.11.1～2010.6.30	言語学
Lau, Ulrich	ハイデルベルグ大学文学部(ドイツ)	2009.9.1～2010.8.31	文献学

□フェロー 2009年度(平成21)年度 ※2009年5月1日現在

氏名	研究分野
エルデムト	文献学
川床 睦夫	考古学
金 少萍	文化人類学
新江 利彦	歴史学
丹菊 逸治	口承文学
中山 和芳	文化人類学

□ジュニア・フェロー 2009(平成21)年度 ※2009年5月1日現在

氏名	研究分野
石森 大知	文化人類学
市川 哲	文化人類学
今堀 恵美	社会人類学
辛嶋 博善	文化人類学
齋藤 久美子	歴史学
藤野 陽平	宗教人類学
溝口 大助	文化人類学
妙木 忍	社会学
山田 勅之	歴史学
林 虹瑛	言語学

[日本学術振興会特別研究員 2009(平成21)年度]

氏名	資格	研究指導者	受入期間
山畑 倫志	PD	中谷 英明	2009.4.1～2012.3.31
久志本 裕子	DC2	宮崎 恒二	2008.4.1～2010.3.31

[AA研所員を主任指導教員とする博士学位取得者 2005-2009(平成17-21)年度]

授与日	学位取得者名	学位論文題目	担当所員
2008.2.20	山田 重周	バザリ社会の仮面—仮面及びその語り口の変化に関する民族誌的研究—	小川 了
2007.6.27	林 虹瑛	台湾閩南語音韻研究—梧棲鎮閩南語を中心に—	梶 茂樹
2007.6.27	檜垣 まり	タンザニア、ダルエスサラームにおけるスワヒリ歌謡、ターラブの誕生と変容	梶 茂樹
2007.2.21	楯沢 英雄	ゴトン・ロヨン思想—インドネシア・ナショナリズムの思想として—	根本 敬
2006.9.20	神谷 俊郎	バツァ語の記述研究—その音声、音韻、文法—	梶 茂樹
2006.7.26	古閑 恭子	アカン語アシャンティ方言の研究—特に音韻を中心として—	梶 茂樹
2006.7.26	結城 佐織	満州語文語における形態と音韻について—『満文金瓶梅』を中心に—	梶 茂樹
2006.2.8	阿部 優子	ベンデ語(バントゥ F.12, タンザニア)の記述研究—音韻論、形態論を中心に—	梶 茂樹
2006.2.8	李 敬淑	発話速度と促音の生成に関する音響音声学的研究	加賀谷 良平

関連資料

[AA研と外国研究機関との学術協定]

締結年	国名	機関	共同研究締結内容	協力する分野
2008	マレーシア	サバ開発研究所	学術協力・学術交流に関する合 意覚書	現地研究拠点活動に係る 専門分野
2007	ドイツ	ケルン大学アフリカ学研究所	学術交流に関する協定書	アフリカ言語学、アフリカ人 類学
2005	インド	高等コンピューティング開発センター (CDAC)	学術協定に関する申し合わせ覚 書	言語解析、情報学
2005	フランス	パリ人間科学館(MSH)	学術協力協定	総合人間学
2005	レバノン	ペイルート・アメリカン大学(AUB)	学術協力に関する申し合わせ	人文科学、社会科学、自然科 学
2005	レバノン	レバノン大学人文科学部第1部(FHS+LU)	学術協力に関する申し合わせ	現地研究拠点活動に係る 専門分野
2005	レバノン	ドイツ東洋学会ペイルート・ドイツ東洋学研 究所(OIB)	学術協力に関する申し合わせ	現地研究拠点活動に係る 専門分野
2004	コートディヴォワール	アフリカ演劇コミュニケーション研究・育成・ 創成センター(CARAS)	学術協力に関する同意書	内戦・民族紛争など人間の 安全保障をめぐる緊急の課 題
2004	オーストリア	オーストリア科学アカデミー(AAS)	学術協力に関する覚え書	インド学、仏教学、文献情報 学
2000	インドネシア	インドネシア科学院社会文化研究センター (PMB-LIPI)	学術協力に関する覚え書	文化人類学
1997	ラオス	文化研究所(IRC)	学術協力に関する協定書	人文科学のすべての分野、 及びこれに関連する分野
1996	イラン	農業計画・経済研究センター(CAPES)	研究協力協定書	イラン文化・日本文化
1988	マリ	人文科学研究所(ISH)	学術協力に関する協約書	人文科学のすべての分野、 及びこれに関連する分野
1988	フランス	チベット言語文化研究所(LCAT)	学術協力に関する協約書	言語学およびチベット語と 日本語に関連したその他の 専門分野
1987	インド	インド統計研究所(ISI)	学術協力に関する協約書	言語学およびインド諸語と 日本語に関連したその他の 専門分野
1987	インド	文部省インド諸語中央研究所(CIIL)	学術協力に関する協約書	言語学およびインド諸語と 日本語に関連したその他の 専門分野
1978	カメルーン	国立科学技術研究機構(ONAREST) (現・高等教育・情報科学・科学研究省 (MESIRES))	科学的協力に関する同意書	人文科学のすべての分野、 特に社会学、言語学、歴史学 民族学

[研究未開発言語文化の調査事業による派遣者]

派遣年度	派遣された研究者(主な渡航先)
2009	ペーリ・パースカララオ(インド)
	海老原 志穂(インド)
	清水 享(中国)
	河内 一博(エチオピア)
2007-2008	伊藤 智ゆき(米国)
	クリスチャン・ダニエルス(タイ、中国)
2006-2008	河合 香史(ケニア、ウガンダ)
2006	長崎 郁(ロシア)
2005-2006	角谷 征昭(タンザニア)
2003-2005	陶安 あんど(イギリス、フランス、中国)
	太田 信宏(イギリス、インド)
2001-2003	床呂 郁哉(スペイン、オランダ)
	呉人 徳司(アメリカ、ロシア)
1999-2001	澤田 英夫(オーストラリア、インド)
	本田 洋(韓国、イギリス)
1997-1999	吉澤 誠一郎(フランス、イギリス、中国、台湾)
	西井 涼子(タイ、イギリス)
1995-1997	飯塚 正人(エジプト、イギリス)
	黒木 英充(シリア、フランス)
1993-1995	新免 康(中国、独立国家共同体、イギリス)
	根本 敬(イギリス、ビルマ)
1991-1993	栗原 浩英(ベトナム、ロシア)
	峰岸 真琴(インド)
1989-1991	林 徹(中国、トルコ)
	栗本 英世(エチオピア、ケニア)

派遣年度	派遣された研究者(主な渡航先)
1987-1989	松村 一登(フィンランド、ソ連)
	宮崎 恒二(オランダ、インドネシア)
1985-1987	中見 立夫(中国、モンゴル)
	梶 茂樹(ザイール、ケニア、ザンビア)
1983-1985	辻 伸久(中国、香港)
	水島 司(インド)
1981-1983	山本 勇次(ネパール)
	新谷 忠彦(ニューカレドニア)
1979-1981	羽田 亨一(イラン、トルコ)
	清水 宏祐(アラブ連合、イラン、トルコ)
1977-1979	石井 博(ネパール)
	藪 司郎(ビルマ)
1975-1977	加賀谷 良平(ボツワナ)
	湯川 恭敏(タンザニア、ザイール)
1973-1975	福井 勝義(ソマリア)
	中嶋 幹起(香港)
1971-1973	内藤 雅雄(インド)
	中野 暁雄(モロッコ、南イエメン)
1969-1971	松下 周二(ナイジェリア)
	家島 彦一(アラブ連合)
1967-1969	石垣 幸雄(エチオピア)
	守野 庸雄(タンザニア)

関連資料

[これまでに言語研修を開講した言語]

()内は修了者数

年度	東京会場	関西会場
2009	アカン語、バンジャービー語	モンゴル語
2008	モンゴル語(9)、 フランス語圏アフリカ手話(10)	トゥヴァ語(3)
2007	マレー語(10)、現代ウイグル語(10)	広東語(11)
2006	リンガラ語(4)、 サハ(ヤクート)語(10)	朝鮮語中級(5)
2005	ベトナム語中級(4)、シンハラ語(3)	ヒンディー語(8)
2004	ビルマ語中級(6)、ベンガル語(11)	カザフ語(3)
2003	マダガスカル語(11)、スダ語(5)	ベトナム語(11)
2002	ネワール語(8)、パリ語(7)	タイ語(7)
2001	パシュトー語(7)、福州語(10)	ムンダ語(3)
2000	シャン語(3)、アフリカーンス語(6)	ベルシア語(4)
1999	フィジー語(4)、ベルシア語(10)	ウルドゥー語(5)
1998	アイヌ語(2)、ハヤ語(11)	カンナダ語(5)
1997	テルグ語(10)、モンゴル語(11)	ハンガリー語(7)
1996	タイ語(14)、現代ヘブライ語(12)	ヨルバ語(7)
1995	アムハラ語(5)、チベット語(25)	上海語(12)
1994	ウォロフ語(9)、ヒンディー語(11)	トルコ語(22)
1993	朝鮮語(17)、グルジア語(17)	モンゴル語(17)
1992	ネパール語(12)、 アラビア語エジプト方言(15)	フィリピン語(12)
1991	エストニア語(12)、ビルマ語(15)	中国語(13)
1990	朝鮮語(11)、インドネシア語(11)	ベルシア語(14)

年度	東京会場	東京会場
1989	ベンガル語(20)、ベトナム語(9)	アラビア語エジプト方言(15)
1988	ヘルシア語(10)、トルコ語(16)	インドネシア語(6)
1987	中原官話(10)、タイ語(19)	シンハラ語(8)
1986	西南官話(5)、タミル語(12)	ベンガル語(8)
1985	朝鮮語(14)、カンボジア語(10)	スワヒリ語(8)
1984	ピリピン語(タガログ語)(12)、 ヨルバ語(3)	トルコ語(15)
1983	チベット語(12)、フィンランド語(21)	バンジャーブ語(8)
1982	アラビア語エジプト方言(12)、 ハンガリー語(17)	フルフルデ語(12)
1981	ヒンディー語(8)、パシュトー語(10)	中国語中級(26)
1980	ネパール語(14)、モンゴル語(14)	ベトナム語(5)
1979	ハウサ語(8)、ビルマ語(14)	タイ語(7)
1978	タイ語(12)、トルコ語(12)	ベルシア語(13)
1977	広東語(14)、マラーティー語(6)	モンゴル語(18)
1976	ベルシア語(10)、スワヒリ語(9)	ビルマ語(5)
1975	カンボジア語(8)、ベンガル語(12)	
1974	朝鮮語(10)、チベット語(12)	

[2009年度科学研究費補助金による研究]

研究種目	代表者名	課題名	採択期間
基盤研究(A)一般	永原 陽子	脱植民地化の双方向的歴史過程における「植民地責任」の研究	H19-H22
基盤研究(A)一般	芝野 耕司	AJAXを用いた直接操作・多言語・語学教育e-Learning OSSの開発	H19-H21
基盤研究(A)一般	真島 一郎	フィールドワークの理論と手法に関する総合調査：海外学術調査の展開をとおして	H18-H21
基盤研究(A)海外学術調査	黒木 英充	レバノン・シリア移民の割り出す地域－宗派体制・クライエンテリズム・市民社会	H21-H24
基盤研究(A)海外学術調査	飯塚 正人	9.11後のイスラーム世界におけるイスラームフォビア意識の浸透に関する研究	H18-H21
基盤研究(B)一般	稗田 乃	ナイル諸語形態統語論の共時的、通時的比較研究	H21-H23
基盤研究(B)一般	陶安 あんど	中国文書行政形成過程の研究	H20-H24
基盤研究(B)一般	高島 淳	クメール、チャム碑文資料に基づくシヴァ教の研究	H19-H21
基盤研究(B)一般	中見 立夫	ロシア帝国と「東北アジア」の成立－国際関係史の視点から－	H19-H21
基盤研究(B)一般	渡辺 己	形態的言語類型論の再構築－語構造の異なる言語の比較対照をとおして－	H19-H21
基盤研究(B)海外学術調査	新谷 忠彦	言語・文化調査に基づくイラワジ・サルウィン流域諸民族の歴史の解明	H21-H24
基盤研究(B)海外学術調査	呉人 徳司	北東アジア諸言語の統合性をめぐる類型的・史的比較研究	H21-H24
基盤研究(B)海外学術調査	栗原 浩英	中国・ASEAN地域協力構想におけるベトナムの定位に関する研究	H20-H23
基盤研究(B)海外学術調査	深澤 秀夫	会話と手話の相互行為分析に基づくマダガスカル言語文化の共通構造と差異の比較研究	H19-H21
基盤研究(B)海外学術調査	菅原 純	近現代テュルク諸語文献を中心とする内陸アジア歴史資料リソースの構築	H18-H20
基盤研究(B)海外学術調査	近藤 信彰	近世・近代ペルシア語文化圏における言語・民族・国家形成	H18-H21
基盤研究(C)一般	高松 洋一	アラビア文字紀年銘に関する基礎研究	H21-H23
基盤研究(C)一般	中山 久美子	オハイアット・ヌートカ語のドキュメンテーション研究およびコーパス構築	H21-H23
基盤研究(C)一般	清水 享	台湾中央研究院所蔵イ(口口)文字文献の分類・解説・解題	H21-H23
基盤研究(C)一般	床呂 郁哉	スルー 海域世界を中心とする特殊海産物の移動と越境に関する歴史人類学的研究	H20-H24
基盤研究(C)一般	豊島 正之	イエズス会辞書類データベースに基づく、対訳を経由する語彙画定過程の研究	H20-H22

関連資料

[2009年科学研究費補助金による研究]

研究種目	代表者名	課題名	採択期間
基盤研究(C)一般	河合 香史	東アフリカ牧畜民における集団間の友好と敵対のバランスシート：諸集団共存の重層性	H20-H22
基盤研究(C)一般	長崎 郁	コリマ・ユカギール語の記述言語学的研究	H19-H22
基盤研究(C)一般	渡部 良子	ベルシア語書簡術・文章術とイラン・イスラーム文化	H19-H22
基盤研究(C)一般	荒川 慎太郎	西夏時代の河西地域における歴史・言語・文化の諸相に関する研究	H19-H21
基盤研究(C)一般	西井 涼子	タイにおけるムスリム・コミュニティの「改宗」をめぐる人類学的比較研究	H19-H21
若手研究(A)	亀井 伸孝	ろう者の人間開発に資する応用言語人類学的研究：アフリカ諸国の手話言語と社会の比較	H21-H24
若手研究(B)	伊藤 智ゆき	延辺朝鮮語の音声学的・音韻論的研究	H21-H22
若手研究(B)	田所 聖志	バブアニューギニアにおける資源開発とエスニック・アイデンティティーの相互作用	H21-H24
若手研究(B)	齋藤 剛	モロッコにおける「先住民」運動の成立と展開をめぐる歴史人類学的研究	H21-H24
若手研究(B)	椎野 若菜	東アフリカにおけるセクシュアリティの変化と「シングル」の生活戦術の可能性	H20-H23
若手研究(B)	永山 ゆかり	アリュートル語音声資料によるテキスト資料データベース構築とそれに基づく記述研究	H19-H22
若手研究(B)	吉村 貴之	現代アルメニア・ナショナリティの形成過程	H19-H22
若手研究(B)	若狭 基道	ウォライタ語(エチオピア)及びその周辺言語の記述的研究	H19-H22
特別研究員奨励費	山畑 倫志	アバランシャ語の類型的及び歴史的特徴の研究	H21-H23
特別研究員奨励費	久志本 裕子	マレーシアのムスリム社会におけるイスラーム知識の伝達に関する人類学的考察	H20-H21

[2009年度受託研究・受託事業プロジェクト]

機関	代表者名	課題名(制度名)
総務省	町田 和彦	次世代インターフェースとしての多言語コンシェルジュの研究開発 (戦略的情報通信研究開発推進制度)
文部科学省	床呂 郁哉	東南アジアのイスラーム：トランスナショナルな連関と地域固有性の動態 (世界を対象としたニーズ対応型地域研究推進事業)

[2008年度出版物目録]

■ 定期刊行物

アジア・アフリカ言語文化研究 ISSN 0387-2807

No.75. 2008.9, No.76. 2009.3.

アジア・アフリカの言語と言語学 ISSN 1881-3283

No.3: 品詞分類の多様性. 2008.9.

フィールドプラス ISSN 1883-4957

創刊号. 2009.1

■ アジア・アフリカ言語文化叢書

安溪貴子『森の人との対話—熱帯アフリカ・ゾンゴラ人の暮らしの植物誌』. アジア・アフリカ言語文化叢書 47. 2009.3. ISBN 978-4-86337-020-3

陶安あんど『秦漢刑罰体系の研究』. アジア・アフリカ言語文化叢書 48. 2009.3. ISBN 978-4-87297-001-2

■ アジア・アフリカ基礎語彙集

Kari, Ethelbert Emmanuel. *Degema—English Dictionary with English Index*. Asian And African Lexicon 52. 2008.12. ISBN 978-4-86337-018-0

菅原純(編)『現代ウイグル語小辞典』. アジア・アフリカ基礎語彙集 53. 2009.2. ISBN 978-4-86337-026-5

■ 共同研究成果出版物

ILCAA Language Monograph Series

Motingea, André Mangulu. *Aspects du bongili de la Sangha-Likouala: Suivis de l'Esquisse du parler Énga de Mampoko, Lulonga*. ILCAA Language Monograph Series 4. 2008.8. ISBN 978-4-87297-996-1

ILCAA North Asian Studies

Kurebito, Tokusu (ed.). *Linguistic Typology of the North, volume1*. 2008.5. ISBN 978-4-87297-997-8

呉人徳司『モンゴル語実践会話入門』. 2009.3. ISBN 987-4-86337-005-0

Marginal Languages and Cultures of Asia

山田敦士『スガノリの記憶—中国雲南省ワ族の口頭伝承』. 2009.3. ISBN 978-4-86337-029-6

Studia Culturae Islamicae

Pudjiastuti, Titik. *Babad Arung Bondhan: Javanese Local Historiography*. Studia Culturae Islamicae 90/MEIS Series 7. 2008.7.

ISBN 978-4-86337-000-5

Beissenbiev, Timur K. *Annotated Indices to the Kokand Chronicles*. Studia Culturae Islamicae 91/MEIS Series 8. 2008.8.

ISBN 978-4-86337-001-2

Reza'i, Omid. *Introduction to Shari'a Documents from Qajar Iran*. Studia Culturae Islamicae 92/MEIS Series 9. 2008.8. ISBN 978-4-86337-002-9

Leventis, Yiorgchos, Nanako Murata Sawayanagi, and Yasushi Hazama. *Crossing Over Cyprus: Studies on the Divided Island in the Eastern Mediterranean*. Studia Culturae Islamicae 93/MEIS Series 6. 2008.8. ISBN 978-4-86337-003-6

関連資料

[2008年度出版物目録]

- 川口琢司・長峰博之(編)・菅原睦(校閲)『チンギズ・ナーマ (Čingīz-nāma)』ウテミシュ・ハージー (Ötämiš Hajī)著 解題・訳註・転写・校訂テキスト. *Studia Culturae Islamicae* 94/MEIS Series 10. 2008.11. ISBN 978-4-86337-017-3
- 清水直美・上岡弘二『テヘラン州の聖所』. *Studia Culturae Islamicae* 96/MEIS Series 12. 2009.3. ISBN 978-4-86337-025-8
- Abdul-Rahim Abu-Husayn. *Rebellion, Myth Making and Nation Building: Lebanon from an Ottoman Mountain Itizam to a Nation State*. *Studia Culturae Islamicae* 97/MEIS Series 13. 2009.3. ISBN 978-4-86337-027-2

その他

- 荒川慎太郎・高井康典行・渡辺健哉(編)『遼金西夏研究の現在(1)』. 2008.6. ISBN 978-4-87297-995-4
- Kato, Takashi. *Linguistic Survey of Tibeto-Burman Languages in Lao P.D.R.* 2008.6. ISBN 978-4-87297-998-5
- 新谷忠彦『富寧金門語一分類詞彙集』. 2008.8. ISBN 978-4-86337-013-5
- Shintani, Tadahiko L. A. *The Palaung Language: Comparative Lexicon of its Southern Dialects (I)*. 2008.8. ISBN 978-4-86337-013-5
- Bhatia, Tej K., and Kazuhiko Machida. *The Oldest Grammar of Hindustāni: Contact and Communication and Colonial Legacy, volume 1: Historical and Cross-Cultural Contexts; Grammar Corpus and Analysis*. 2008.10. ISBN 978-4-86337-014-2
- Bhatia, Tej K., and Kazuhiko Machida. *The Oldest Grammar of Hindustāni: Contact and Communication and Colonial Legacy, volume 2: Lexical Corpus and Analysis [Ketelaar's Section 1-45]*. 2008.10. ISBN 978-4-86337-015-9
- Bhatia, Tej K., and Kazuhiko Machida. *The Oldest Grammar of Hindustāni: Contact and Communication and Colonial Legacy, volume 3: Ketelaar: Original Manuscript [1698 A.D.]*. 2008.10. ISBN 978-4-86337-016-6
- Kurebito, Tokusu (ed.). *Ambiguity of Morphological and Syntactic Analyses*. 2008. ISBN 978-4-87297-999-2
- Satha-Anand, Chaiwat (ed.) *Imagined Land? The State and Southern Violence in Thailand*. MEIS Series 11. 2009. ISBN 978-4-86337-021-0
- 黒木英充(編)『緊急集会 イスラエルによるガザ侵攻を考える 講演録』. MEIS Series 14. 2009.3. ISBN 978-4-86337-028-9
- 末成道男(編)『ベトナム文化人類学文献解題』. 2009.3. ISBN 978-4-86337-023-4
- 永原陽子(編)『「植民地責任」論—脱植民地化の比較史』. 2009.3. ISBN 978-4-86337-024-1

■言語研修テキスト

- 呉人徳司・フンビシ・テルゲルマー 2008年度言語研修モンゴル語テキスト『モンゴル語で話そう』. 2008.8. ISBN 978-4-86337-004-3
- 高島尚生 平成20年度トゥヴァ語研修テキスト1『基礎トゥヴァ語文法』. 2008.8. ISBN 978-4-86337-006-7
- 高島尚生 平成20年度トゥヴァ語研修テキスト2『トゥヴァ語教本』. 2008.8. ISBN 978-4-86337-007-4
- ダンバー・オクサーナ・ヴァシーリエヴナ・高島尚生 平成20年度トゥヴァ語研修テキスト3『トゥヴァ語会話集』. 2008.8. ISBN 978-4-86337-008-1
- 高島尚生・ダンバー・オクサーナ・ヴァシーリエヴナ 平成20年度トゥヴァ語研修テキスト4『トゥヴァ語分類語彙集』. 2008.8. ISBN 978-4-86337-009-8
- 中嶋善輝 平成20年度トゥヴァ語研修テキスト5『トゥヴァ語基礎例文1500』. 2008.8. ISBN 978-4-86337-010-4
- 中嶋善輝 平成20年度トゥヴァ語研修テキスト6『トゥヴァ語・日本語小辞典』. 2008.8. ISBN 978-4-86337-011-1
- 亀井伸孝(著)・エブナ・エトウンディ・アンリ(監修) 2008年度言語研修『フランス語圏アフリカ手話』. 2008.8. ISBN 978-4-86337-012-8
- 張淑儀・上神忠彦 言語研修「広東語」参考教材『広東語学習語彙集』. 2008.10. ISBN 978-4-86337-019-7

予算

[2009年度予算額(運営費交付金)]※常勤人件費除く

(単位:千円)

運営費 交付金	一般経費 (研究費)	教員個人研究費	10,460	137,670
		客員研究費	1,720	
		研究ユニット経費	11,312	
		IRC経費	24,640	
		FSC経費	2,877	
		言語研修経費	10,550	
		成果等刊行経費	7,560	
		広報等経費	5,730	
		文献資料経費	6,925	
		研究未開発言語文化派遣経費	1,400	
		会議等経費	500	
		共通経費	5,805	
		所長裁量経費	2,650	
		非常勤研究員人件費	18,600	
	外国人研究員人件費	24,720		
	予備費	2,221		
	特別教育 研究経費	アジア・アフリカの言語文化に関する共同研究	33,590	
中東イスラーム研究教育プロジェクト		64,327		
急速に失われつつある言語多様性に関する国際研究連携体制の構築 (言語ダイナミクス科学研究プロジェクト)		76,900		
計			312,487	

[2009年度外部資金受入額]

(単位:千円)

科学研究費補助金(直接経費)	基盤A(海外、一般含む)	36,200 / 5件
	基盤B(海外、一般含む)	37,200 / 11件
	基盤C	9,900 / 10件
	若手研究	9,779 / 8件
	特別研究員奨励費	1,800 / 2件
受託研究費・受託事業費		26,948 / 2件
計		121,827 / 38件

※研究成果公開促進費除く

[歳出決算額(運営費交付金)]

(単位:千円)

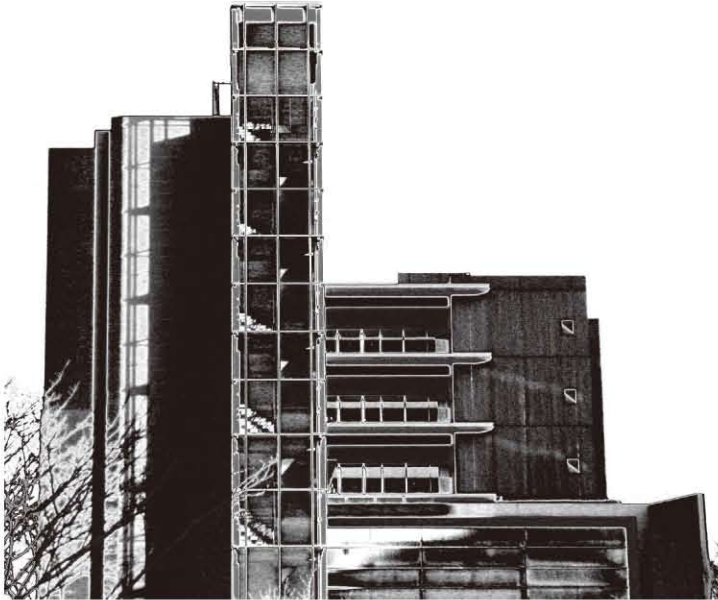
区分	2006年度	2007年度	2008年度
人件費	467,045	460,104	454,515
物件費	197,421	226,916	267,608
計	664,466	687,020	722,123

沿革

年度	事項
1961(S36)	日本学術会議がアジア・アフリカ諸国についての研究を進めるための共同利用研究所を設立するよう政府に勧告。
1964(S39)	アジア・アフリカ言語文化研究所が東京外国語大学に附置。 わが国最初の人文科学・社会科学系共同利用研究所。
1967(S42)	研究未開発地域への助手等の現地投入を開始。
1974(S49)	言語研修を本格的に開始。
1978(S53)	メインフレーム・コンピュータを導入。
1983(S58)	海外学術調査(当時、国際学術研究)総括班の事務局が置かれる。
1991(H3)	研究体制の抜本的見直しを行ない、従来の小部門制(及び1客員部門)から4大部門制(及び1客員部門)をとる。
1992(H4)	東京外国語大学大学院地域文化研究科に設置された博士後期課程の教育に所員が参加。
1995(H7)	文部省から「卓越した研究拠点(COE)」に指定される。
1996(H8)	COEとして初の国際シンポジウム「東南アジアにおける人の移動と文化の創造」を開催。
1997(H9)	附属情報資源利用研究センターを設置。
2001(H13)	中核的研究拠点形成プログラム(2002年度に文部科学省科学研究費補助金特別推進研究に移行) 「アジア書字コーパス拠点」が発足。(～2005年)
2002(H14)	旧西ヶ原キャンパスから現在の府中キャンパスに移転。 文部科学省科学研究費補助金特定領域研究「資源の配分と共有に関する人類学的統合領域の構築 —象徴系と生態系の関連をとおして」が発足。(～2006年)
2004(H16)	東京外国語大学、国立大学法人になる。
2005(H17)	複数の研究ユニットからなるプロジェクト研究部を設置。 フィールドサイエンス研究企画センターを設置。 中東研究日本センターをレバノン共和国のベイルートに開設。 中東イスラーム研究教育プロジェクトを開始。
2006(H18)	文部科学省の「世界を対象としたニーズ対応型地域研究推進事業」枠により 「東南アジアのイスラーム～トランスナショナルな連関と地域固有性の動態(略称ISEA)」を開始。
2007(H19)	コタキナバル・リエゾンオフィスをマレーシア・サバ州に設置。
2008(H20)	「急速に失われつつある言語多様性に関する国際研究連携体制の構築」プロジェクトを開始。

■歴代所長

岡 正雄	1964年—1972年	池端 雪浦	1995年—1997年
徳永 康元	1972年—1974年	石井 溥	1997年—2001年
北村 甫	1974年—1983年	宮崎 恒二	2001年—2005年
梅田 博之	1983年—1989年	内堀 基光	2005年—2006年
山口 昌男	1989年—1991年	大塚 和夫	2006年—2009年
上岡 弘二	1991年—1995年	栗原 浩英	2009年—



■ロゴマークについて…ラテンアルファベットのAを二つ並べたように見えますが、実はこれはブラーフミー文字の第1字とフェニキア文字の第1字を組み合わせたものです。

2004年度より、「東京外国語大学」は、「国立大学法人」として新しく生まれ変わりました。これにともない、東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所では、「アジア・アフリカ言語文化研究所」の名称ならびに本研究所の略称である「AA研」と左記のロゴマークの商標登録査定を特許庁に申請し、平成17年8月19日付で商標登録証が発行され、商標として登録されました。

東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所
〒183-8534 東京都府中市朝日町3-11-1

TEL 042-330-5600 FAX 042-330-5610

MAIL ilcaa@aa.tufts.ac.jp

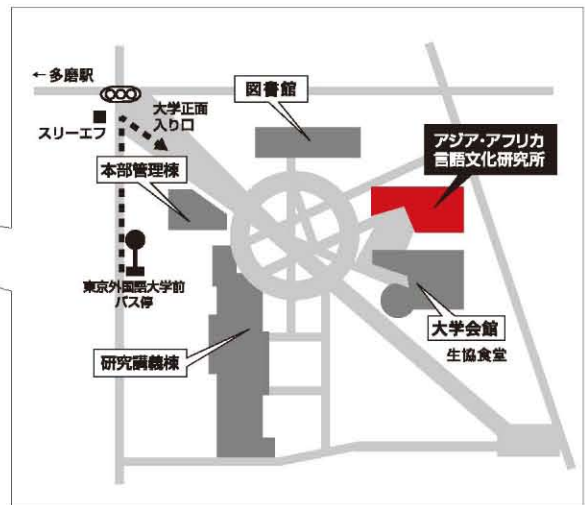
URL http://www.aa.tufts.ac.jp/

Research Institute for Languages and
Cultures of Asia and Africa,
Tokyo University of Foreign Studies,
3-11-1 Asahi-cho, Fuchu-shi, Tokyo, 183-8534, Japan
phone +81-(0)42-330-5600, fax +81-(0)42-330-5610

AA研へのアクセス



- JR中央線「東京」駅～「武蔵境」駅、約40分
JR中央線「新宿」駅～「武蔵境」駅、約20分
- JR中央線「武蔵境」駅より西武多摩川線に乗り換え、「多磨」駅下車、駅より徒歩約5分。
- 京王線「飛田給」駅北口または「調布」駅北口より「多磨」駅行きバス乗車、「東京外国語大学前」停留所で下車、停留所より徒歩2分。「飛田給」駅北口から約13分間隔でバスが運行。所要時間約7分。「調布」駅北口からは20～30分間隔で運行。所要時間約20分。バス時刻表は <http://www.bus-navi.com/>



【表紙】 聖地ベツレヘムの子ども

イエス・キリスト生誕の地として知られるベツレヘムは、今は紛争下のパレスチナ自治区にある。巡礼者や観光客でクリスマス時期はにぎわう町でも、イスラエルの占領下におかれた人々の生活は苦しい。そんな中でも子どもの笑顔は、変わらぬ幸せと喜びを運んでくれる。失業中の父親の心配をよそに、3世代目のパレスチナの子どもはどんな未来を思い描くのだろう。

撮影場所：パレスチナ自治区ベツレヘム市内の友人宅にて

撮影者：錦田愛子(共同研究員)

撮影日：2006年3月7日